

# 放射線科学概論

小倉昭弘<sup>\*1</sup>

2022/09/23

<sup>\*1</sup> 日本大学松戸歯学部物理学教室



# はじめに

## メールとホームページ

1. [E-mail] [ogura.akihiro@nihon-u.ac.jp](mailto:ogura.akihiro@nihon-u.ac.jp)
2. [演習問題の解答など] manaba に掲載いたします。 <https://kokushikan.manaba.jp/ct/login>
3. [講義日程表] <http://physweb.mascac.nihon-u.ac.jp/ogu/lecture/>
4. [アイソトープ研究センター] <http://physweb.mascac.nihon-u.ac.jp/isotope/>

## 参考書

- 『やさしい放射線とアイソトープ』 日本アイソトープ協会 (丸善)

上記アイソトープ研究センターのホームページに本の紹介があります。

## 用意するもの

1. 関数電卓
2. A4 ミリ方眼グラフ用紙
3. 20~30cm 程度の定規
4. このテキスト

## 成績

1. 前提条件：放射線関連の本を 1 冊読み、講義最終日までに内容と感想を manaba のレポートから提出すること。
2. 試験：テキスト・関数電卓持ち込み可

## 放射線関連の資格試験

資格	省庁	試験機関
第一種放射線取扱主任者 第二種放射線取扱主任者 第三種放射線取扱主任者	環境省 原子力規制委員会	(財) 原子力安全技術センター <a href="http://www.mustec.or.jp/">http://www.mustec.or.jp/</a>
核燃料取扱主任者 原子炉主任技術者		原子力規制委員会
エックス線作業主任者 ガンマ線透過写真撮影作業主任者	厚生労働省	(財) 安全衛生技術試験協会 <a href="http://www.exam.or.jp/">http://www.exam.or.jp/</a>
第一種作業環境測定士 第二種作業環境測定士		
診療放射線技師		厚生労働省

## 日程

回数	月日	大項目	小項目	節番号
1	09/23	放射線物理学	放射線の利用, 原子核の構成	1.1~1.3
2	09/30	放射線化学	原子核の壊変と放射線, 壊変系列	1.4, 1.5
3	10/07		壊変法則, 半減期	1.6
4	10/14		放射能と質量	1.7
5	10/21		放射平衡	1.8
6	10/28		放射線と物質との相互作用	1.9~1.11
7	11/11		核反応, 原爆と原発	1.12
8	11/18		放射線測定	測定器
9	11/25	測定実習		2.7
10	12/02	放射線生物学	放射線影響の分類	3.1~3.4
11	12/09		生体への影響, しきい値	3.5, 3.6
12	12/16		内部被曝, 実効線量係数	3.7
13	12/23	放射線管理 法令	防護の目的と体系, 法の目的	4.1~4.5
14	01/13		作業環境管理, 線源管理, 個人管理	4.6~4.8
15	01/20	まとめ	放射線とは	
16	01/27	秋期試験		

# 目次

はじめに	i
<b>第 1 章 放射線物理学・化学</b>	<b>1</b>
1.1 原子の構造と特性 X 線・電離	1
1.2 原子核の構成	1
1.3 結合エネルギー	3
1.4 原子核の壊変と放射線, 壊変系列	5
1.5 放射性核種の分類	7
1.6 壊変法則と放射能	9
1.7 放射能と質量	10
1.8 放射平衡	11
1.9 放射線と物質との相互作用 (総論)	13
1.10 荷電粒子と物質との相互作用	14
1.11 $\gamma$ 線と物質との相互作用	16
1.12 核反応, 中性子と物質との相互作用	18
<b>第 2 章 放射線測定</b>	<b>20</b>
2.1 概略	20
2.2 測定器の種類と特性	21
2.3 気体の検出器	21
2.4 固体, 液体の検出器	22
2.5 個人の被曝線量の測定器	23
2.6 測定値の取扱い	23
2.7 放射線測定実習	25
<b>第 3 章 放射線生物学</b>	<b>26</b>
3.1 放射線影響の分類	26
3.2 放射線に関する単位	27
3.3 原子・分子レベルの影響と修飾要因	28
3.4 細胞レベルの影響	29
3.5 組織・臓器レベルの影響	31
3.6 個体 (胎児を含む) レベルの影響	34
3.7 内部被曝	35
<b>第 4 章 法令・放射線管理</b>	<b>38</b>
4.1 日常生活と放射線	38
4.2 防護の目的と体系, 法の目的	39
4.3 法律の成立と ICRP	40
4.4 原子力基本法	40
4.5 RI 規制法	41
4.6 作業環境管理	42
4.7 線源管理	42
4.8 個人管理	43

付録 A 放射線の単位	44
A.1 放射線で使われる SI 単位	44
A.2 10 の整数乗倍を表す SI 接頭語	44
A.3 電子ボルト	45
付録 B 周期表	46
B.1 周期表	46
B.2 核外電子配置	47
付録 C 同位体	50
関連図書	68

# 第1章 放射線物理学・化学

## 1.1 原子の構造と特性 X 線・電離

原子は、中心に原子核があり、その周りに電子があるという構造をしている。電子の運動する軌道は決まっていて、内側から K 殻, L 殻, M 殻, N 殻, …とよばれている。周期表と電子配置については付録 B を参照のこと。

原子外部からエネルギーをもらうと、電子は外側の軌道に飛び移ることができる。これを励起 (excitation) という。励起された電子は不安定なエネルギー状態 (励起状態) にいるため、光を放出して内側の軌道へと遷移する。この光は、軌道間のエネルギー差によって決められた波長をもつので、特性 X 線 (characteristic X ray) または蛍光 (fluorescence) とよばれる。

また、原子外部からもらうエネルギーがより大きいと、電子は原子核の束縛から離れて自由に運動できるようになる。つまり正に帯電した陽イオンと電子にわかれる。これを電離またはイオン化 (ionization) という。

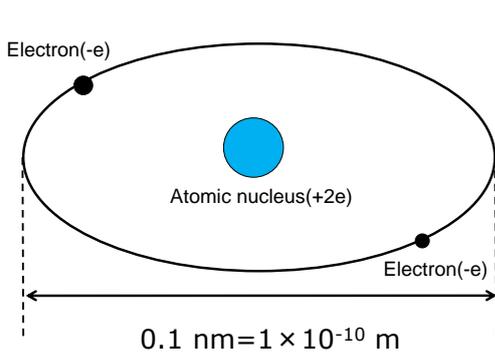


図 1.1: 原子のモデル

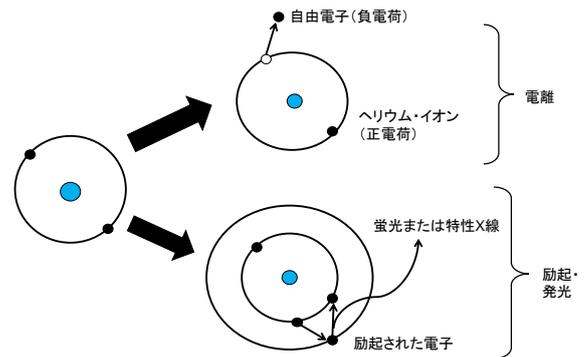


図 1.2: 原子の電離と励起・発光

## 1.2 原子核の構成

原子核に関する用語を並べる。

構成要素

$$\text{原子 (atom)} \left\{ \begin{array}{l} \text{核子 (nucleon)} \left\{ \begin{array}{l} \text{陽子 (proton)} \quad : Z \text{ 個 (原子番号 atomic number)} \\ \text{中性子 (neutron)} \quad : N \text{ 個} \end{array} \right. \\ \text{電子 (electron)} : Z \text{ 個} \end{array} \right. \quad (1.1)$$

電荷と質量

原子核は  $Z$  個の陽子から成っているので、原子核は  $+Ze$  [C] の電荷を持っている。また、原子の中の陽子と電子は同数なので、原子全体では電荷を持たない。最外殻を回っている電子がとれると、陽イオンとなる。上の構成要素の電荷と質量を表 1.1 に掲げる。

陽子と中性子の質量は、ほぼ同じ大きさであるが、中性子のほうが少し大きいことは記憶しておこう。

表 1.1: 電荷と質量

粒子	電荷	質量
陽子	$+e = +1.60 \times 10^{-19} \text{ C}$	$m_p = 1.67262 \times 10^{-27} \text{ kg}$
中性子	0	$m_n = 1.67493 \times 10^{-27} \text{ kg}$
電子	$-e = -1.60 \times 10^{-19} \text{ C}$	$m_e = 9.10938 \times 10^{-31} \text{ kg}$

### 質量数

原子核の中の、陽子の数  $Z$  と中性子の数  $N$  を足したものを、**質量数** (mass number)  $A$  という。質量数は、ほぼ原子量に等しい。

$$A = Z + N \sim \text{原子量 [g]} \quad (1.2)$$

### 表記

周期表で使われる元素記号を  $X$  とすると、

$${}^A_Z X \quad (1.3)$$

と書き表す。この表記から、中性子の数  $N$  は、 $N = A - Z$  で求めることができる。例えば、表 1.2 のようである。

表 1.2: 中性子数の計算

元素	中性子数
${}^4_2\text{He}$	$4 - 2 = 2$
${}^{16}_8\text{O}$	$16 - 8 = 8$
${}^1_0\text{n}$	$1 - 0 = 1$

元素記号は各元素に対して特有なので、原子番号  $Z$  を書かなくても元素は指定できる。そこで、普通、質量数のみ書いて、原子番号を省略することが多い。例えば次のようである。

$${}^{233}\text{U}, \quad {}^{235}\text{U}, \quad {}^{238}\text{U}$$

### 原子核の大きさ

原子核は、ほぼ球形をしている。その半径  $R$  は質量数  $A$  を使って

$$R = 1.4 \times 10^{-15} A^{1/3} [\text{m}] \quad (1.4)$$

である。断面積とは、原子核に投射された粒子が原子核に衝突する確率を表す。原子核の半径が  $R$  で与えられるとき、断面積  $\sigma$  は、

$$\sigma = \pi R^2 \sim R^2 = 10^{-28} \text{ m}^2 = 1 \text{ barn}$$

で与えられる。

### 同位体

原子番号  $Z$  が同じで、質量数  $A$  が異なる (すなわち、中性子の数  $N$  が異なる) 原子核を**同位体** (isotope) <sup>\*1</sup> という。元素の化学的性質は原子番号  $Z$  で決まるので、同位体の化学的性質は変わらない。同位体の例を図 1.3 に掲げる。

同位体以外にも、いくつかの用語が放射線の世界で見られる。それらを図 1.4 にまとめておこう。

<sup>\*1</sup>F. Soddy(英) の命名である。iso は同じ、tope は位置を意味するギリシャ語からの造語である。Nature, 92 (1913) 399

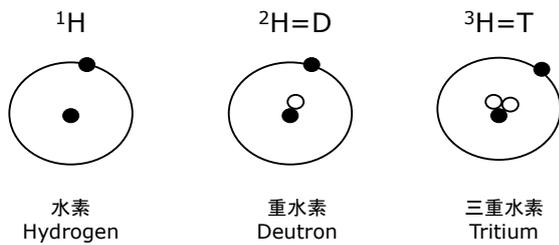


図 1.3: 水素の同位体

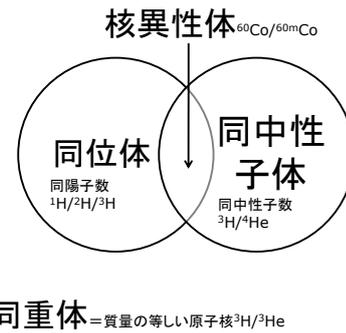


図 1.4: 同位体の種類

### 1.3 結合エネルギー

#### §1.3.1 統一原子質量単位

国際単位系で質量は kg であるが、 $10^{-27}$  kg とあまりに小さいので、原子の世界では、統一原子質量単位 (unified atomic mass unit) [u] が使われる。

$^{12}_6\text{C}$  の原子 1 個の質量を 12.00 [u] と定める。

$^{12}_6\text{C}$  の原子 12g の中に含まれる原子の数は、Avogadro 数  $N_A = 6.02214076 \times 10^{23}$  個 (定義値) である。

$$^{12}_6\text{C} \text{ の原子 1 個の質量} = 12 \text{ [u]} = \frac{12 \times 10^{-3} \text{ kg}}{6.02214076 \times 10^{23} \text{ 個}} \quad (1.5)$$

したがって、

$$1 \text{ [u]} = \frac{1 \times 10^{-3}}{6.02214076 \times 10^{23}} = 1.66053906 \times 10^{-27} \text{ kg} \quad (1.6)$$

陽子、中性子と電子の質量の一覧表を表 1.3 に掲げる。

表 1.3: 質量とエネルギー

	質量		エネルギー	
	kg	u	MeV	J
陽子	$m_p = 1.67262 \times 10^{-27}$	$= 1.007276$	$m_p c^2 = 938.27$	$= 1.503 \times 10^{-10}$
中性子	$m_n = 1.67493 \times 10^{-27}$	$= 1.008665$	$m_n c^2 = 939.57$	$= 1.505 \times 10^{-10}$
電子	$m_e = 9.10938 \times 10^{-31}$	$= 0.00054858$	$m_e c^2 = 0.5110$	$= 8.187 \times 10^{-14}$
$\mu$ 粒子			$m_\mu c^2 = 105.66$	

#### §1.3.2 静止エネルギー

Einstein の特殊相対性理論から、質量とはエネルギーの存在様式の 1 つである。物体の質量を  $m$  [kg] とすると、エネルギー  $E$  [J] は

$$E = mc^2 \quad (1.7)$$

である。ここで  $c$  は光速で、 $c = 3.0 \times 10^8$  m/s である。

すると、統一原子質量単位 1 [u] は、

$$\begin{aligned}
 1 \text{ [u]} \times c^2 &= 1.6605402 \times 10^{-27} \text{ kg} \cdot (3.00 \times 10^8 \text{ m/s})^2 \\
 &= 1.492 \times 10^{-10} \text{ J} = 931.5 \text{ MeV}
 \end{aligned} \quad (1.8)$$

となる。ここで、第 A.3 節により、単位を J から eV に換えた。

陽子、中性子と電子の質量の一覧表を表 1.3 に掲げる。SI 単位での質量は kg であるが、原子核では「統一原子質量単位」を使うことが多い。さらに、質量をエネルギーの単位で表すことも多い。一番右の J の欄はほとんど使われることはないが、参考のため載せておいた。

### §1.3.3 結合エネルギー

陽子は正の電荷を持っているにもかかわらず、小さな原子核の中に閉じ込められるのは核子どうしに核力 (nuclear force) が働いているからである。原子核を構成している核子をバラバラにするには、核力に抗して仕事をしなければならない。逆に核子がまとまって原子核を作るには、エネルギーを放出する。このエネルギーを結合エネルギー (binding energy) という。

一方、 $Z$  個の陽子と  $N$  個の中性子からなる原子の質量を  $M$  とすると、

$$Zm_p + Nm_n + Zm_e > M \quad (1.9)$$

となる。そこで、

$$\Delta m = Zm_p + Nm_n + Zm_e - M \quad (1.10)$$

を質量欠損 (mass defect) という。

原子核を構成するときに、質量欠損に相当する結合エネルギーを放出する。この結合エネルギー  $E$  は、

$$E = \Delta m \times c^2 = (Zm_p + Nm_n + Zm_e - M)c^2 \quad (1.11)$$

と表される。

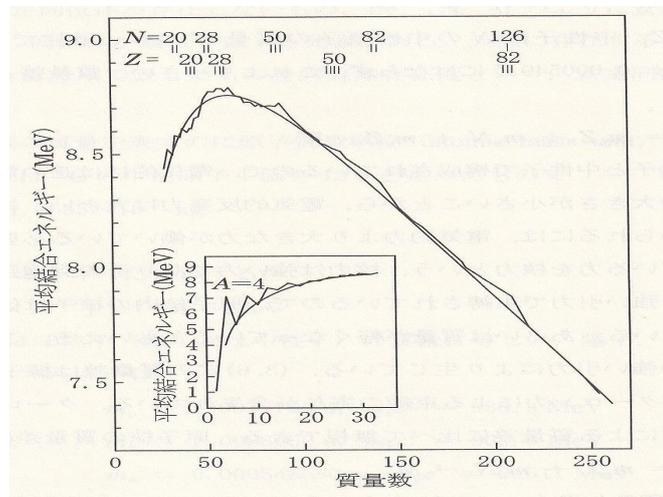


図 1.5: 核子 1 個あたりの結合エネルギー [1]

## 1.4 原子核の壊変と放射線, 壊変系列

### §1.4.1 原子核の壊変

陽子は正の電荷を持っているにもかかわらず, 小さな原子核の中に閉じ込められるのは, 核子どうしに核力が働いているからである。核力は, とても短い距離でしか働かないので, 原子番号(つまり原子核)が大きくなると, 陽子どうしの電氣的反発力によって原子核が不安定となる。また, 原子番号が小さくても, 核力とクーロン力のバランスの悪い原子核が存在する。これらの不安定な原子核は, 放射線 (radiation) を放出して安定な原子核になってゆく。これを原子核の壊変 (decay) という\*2。

放射線を出す原子核を, 放射性同位体 (RI : radioisotope) という。逆に, 放射線を出さない原子核を安定同位体という。原子番号が 83 の  ${}_{83}\text{Bi}$  以上の原子核には, 安定なものは存在しない。付録 C に同位体を掲載している。

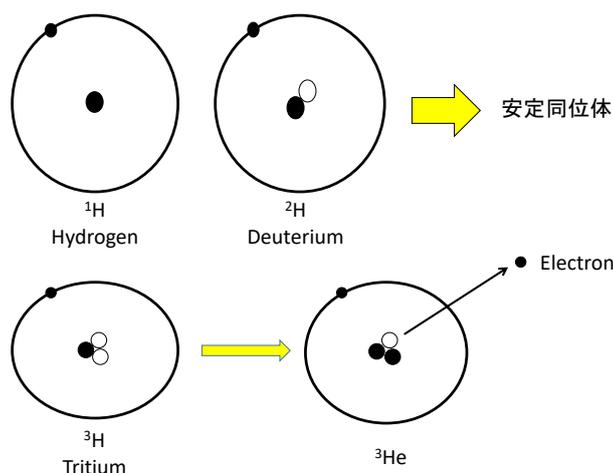


図 1.6: 安定同位体 ( ${}^1\text{H}$ ,  ${}^2\text{H}$ ) と放射性同位体 ( ${}^3\text{H}$ )

### §1.4.2 壊変と放射線の種類

壊変には, 次に述べる種類がある。壊変前の核種  $X$  を親核 (parent nucleus), 壊変後の核種  $Y$  を娘核 (daughter nucleus) という。これらの壊変の前後で,  $Z$  と  $A$  の総和は変化しない。一覧表を表 1.4 にまとめたあと, それぞれ解説しよう。

表 1.4: 壊変の種類

壊変の種類	壊変過程	例
$\alpha$ 壊変	${}^A_Z X \rightarrow {}^{A-4}_{Z-2} Y + {}^4_2\text{He}$	${}^{226}_{88}\text{Ra} \rightarrow {}^{222}_{86}\text{Rn} + {}^4_2\text{He}$
$\beta^-$ 壊変	${}^A_Z X \rightarrow {}^A_{Z+1} Y + e^- + \bar{\nu}$	${}^{90}_{38}\text{Sr} \rightarrow {}^{90}_{39}\text{Y} + e^- + \bar{\nu}$
$\beta^+$ 壊変	${}^A_Z X \rightarrow {}^A_{Z-1} Y + e^+ + \nu$	${}^{22}_{11}\text{Na} \rightarrow {}^{22}_{10}\text{Ne} + e^+ + \nu$
電子捕獲 (EC)	${}^A_Z X + e^- \rightarrow {}^A_{Z-1} Y + \nu$	${}^{57}_{27}\text{Co} + e^- \rightarrow {}^{57}_{26}\text{Fe} + \nu$
核異性体転移 ( $\gamma$ 壊変)	${}^A_m Z X (\text{励起状態}) \rightarrow {}^A Z X (\text{基底状態}) + \gamma (\text{光子})$	${}^{60m}_{27}\text{Co} \rightarrow {}^{60}_{27}\text{Co} + \gamma$

#### $\alpha$ 壊変

ラジウム  ${}^{226}_{88}\text{Ra}$  は,  $\alpha$  粒子を放出して, ラドン  ${}^{222}_{86}\text{Rn}$  と壊変する。この  $\alpha$  粒子は, のちに  ${}^4_2\text{He}$  であることがわかった。

(例)  ${}^{226}_{88}\text{Ra}$ ,  ${}^{210}_{84}\text{Po}$ ,  ${}^{241}_{95}\text{Am}$

\*2崩壊という言葉もかつて使われたが, いまでも高校物理では使われている。

$\beta^-$  壊変

中性子過剰な原子核の中性子  $n$  が陽子  $p$  に変わる過程である。



このとき、電子  $e^-$  と反ニュートリノ (antineutrino)  $\bar{\nu}$  を放出する。この電子は、原子核のまわりを回っている電子 (軌道電子) ではなく、原子核から放出される。この壊変では、原子番号は1つ上がるが、質量数は変化しない。

(例)  ${}^{90}_{38}\text{Sr}$ ,  ${}^{14}_6\text{C}$ ,  ${}^{35}_{16}\text{S}$ ,  ${}^{63}_{28}\text{Ni}$ ,  ${}^{147}_{61}\text{Pm}$

 $\beta^+$  壊変

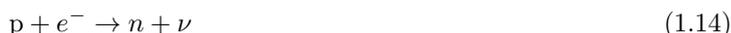
陽子過剰な原子核の陽子  $p$  が中性子  $n$  に変わる過程である。



このとき、陽電子 (positron)  $e^+$  とニュートリノ (neutrino)  $\nu$  を放出する。ただし、 $e^+$  は単体では存在しないので、 $\beta$  線というときには電子  $e^-$  を意味する。この壊変では、原子番号は1つ下がるが、質量数は変化しない。

## 電子捕獲 (EC : Electron capture)

陽子過剰な原子核の中にある陽子が、軌道電子を捕獲し中性子に変わる過程である。



この結果、原子番号は1つ下がるが、質量数は変化しない。この過程は、(1.13) と同等な過程であり、陽子過剰な原子核ではどちらかが起こる。これを競合過程という。

核異性体転移 (IT : Isomer transition,  $\gamma$  壊変)

原子核が  $\alpha$  変壊や  $\beta$  壊変をおこすと、原子核は興奮 (励起) 状態にある。そこで、光子を放出して安定な基底状態になる。この壊変の前後の核種は、陽子数も中性子数も変わらない。ただ、核種のエネルギー状態が違うだけである。これらの核種を、核異性体 (nuclear isomer) という。そして、壊変前の核種の質量数に  $m$  (metastable の意) をつけて区別する。

(例)  ${}^{60}_{27}\text{Co}$ ,  ${}^{137}_{55}\text{Cs}$ ,  ${}^{192}_{77}\text{Ir}$ ,  ${}^{131}_{53}\text{I}$ ,  ${}^{24}_{11}\text{Na}$ ,  ${}^{198}_{79}\text{Au}$

## §1.4.3 壊変図

壊変図とは、前節の壊変を模式的に描いたものである。

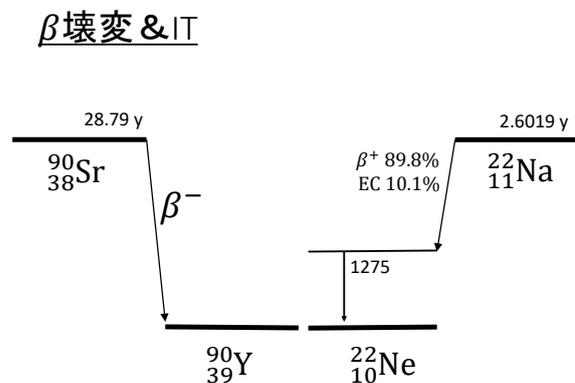
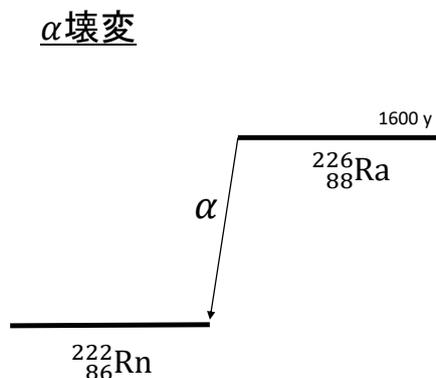


図 1.7: 壊変によって原子番号が下がるときは、左下に進む。

図 1.8: 壊変によって原子番号が上がるときは、右下に進む。核異性体転移のときは、真下に進む。

## 1.5 放射性核種の分類

放射性核種は以下のように三つに分類しよう。

1. 天然誘導放射性核種
2. 壊変系列に属さない天然放射性核種
3. 壊変系列にをつくる核種

### §1.5.1 天然誘導放射性核種

宇宙線は、地球の外に起源を持つ放射線である。宇宙から地球に降り注ぐ一次宇宙線は、ほとんどが陽子、中性子や  $\alpha$  粒子である。

この一次宇宙線が大気上層部で窒素や酸素の原子と衝突すると、 ${}^3\text{H}$  や  ${}^{14}\text{C}$  のような多くの種類の放射線の集合である二次宇宙線が発生する。



### §1.5.2 壊変系列に属さない天然放射性核種

地球誕生のときから存在する放射性核種のことである。付録 C には、「天」と書いてある。

この中でカリウム K は植物にとって必須の元素であり、その中に放射性的な  ${}^{40}\text{K}$  がある。したがって、植物の中には必ず  ${}^{40}\text{K}$  があり、日々私たちは野菜を食べることによって体内に放射性物質を取り込んでいる。

### §1.5.3 壊変系列をつくる核種

壊変系列をつくる放射性同位元素の一番初めにくる核種は  $^{238}\text{U}$ ,  $^{232}\text{Th}$ ,  $^{235}\text{U}$ ,  $^{237}\text{Np}$  の4種である。この4核種を一次放射性核種という。この一次放射性核種の壊変で生成する核種を二次放射性核種という。

#### ウラン系列 ( $4n+2$ ): 図 1.9

$^{238}\text{U}$  から始まり,  $^{206}\text{Pb}$  で終わる。この間に,  $\alpha$  壊変を8回,  $\beta$  壊変を6回おこす。この系列に属する原子核の質量数は, 4で割ると2余る。

#### トリウム系列 ( $4n$ ): 図 1.10

$^{232}\text{Th}$  から始まり,  $^{208}\text{Pb}$  で終わる。この間に,  $\alpha$  壊変を6回,  $\beta$  壊変を4回おこす。この系列に属する原子核の質量数は, 4で割りきれれる。

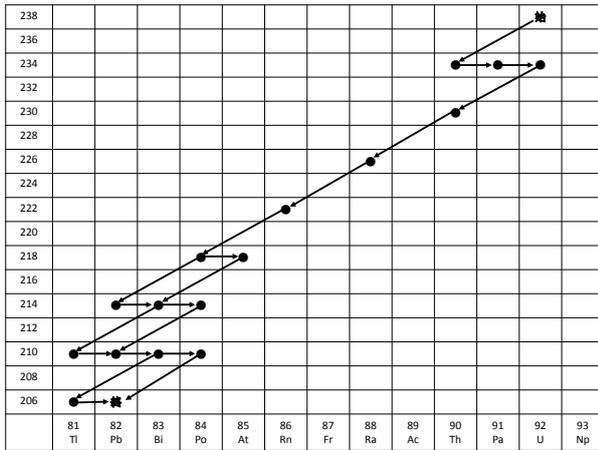


図 1.9: ウラン系列 ( $4n+2$ )

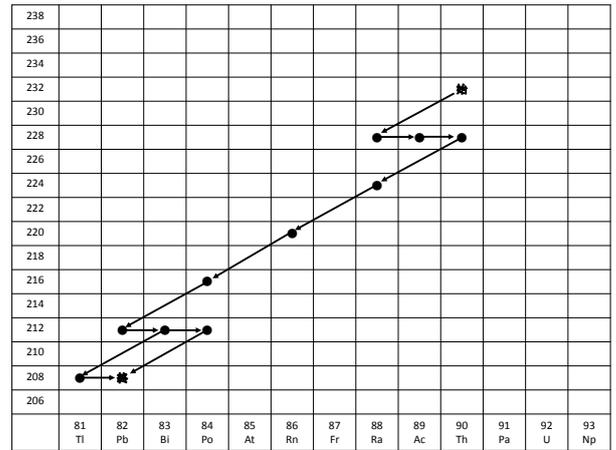


図 1.10: トリウム系列 ( $4n$ )

#### アクチニウム系列 ( $4n+3$ ): 図 1.11

$^{235}\text{U}$  から始まり,  $^{207}\text{Pb}$  で終わる。この間に,  $\alpha$  壊変を7回,  $\beta$  壊変を4回おこす。この系列に属する原子核の質量数は, 4で割ると3余る。

#### ネプツニウム系列 ( $4n+1$ ): 図 1.12

$^{237}\text{Np}$  から始まり,  $^{205}\text{Tl}$  で終わる。この間に,  $\alpha$  壊変を8回,  $\beta$  壊変を4回おこす。この系列に属する原子核の質量数は, 4で割ると1余る。 $^{237}\text{Np}$  の半減期は  $2.14 \times 10^6$  年と地球の年齢 ( $46$  億年 =  $4.6 \times 10^9$  年) より短いので現在では天然にはこの系列は存在しない。人工的に作ることはできる。

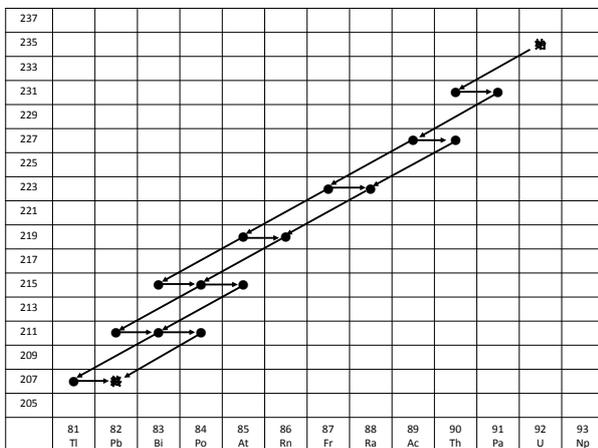


図 1.11: アクチニウム系列 ( $4n+3$ )

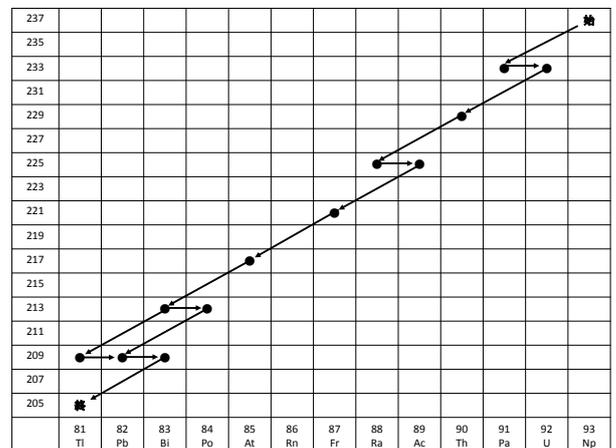


図 1.12: ネプツニウム系列 ( $4n+1$ )

## 1.6 壊変法則と放射能

放射性元素は、時間の経過にしたがって壊変してゆく。その壊変を支配する壊変法則 (decay law) を調べよう。

1秒間に壊変する原子核の個数を放射能 (radioactivity) という。  
単位は Bq(ベクレル)= 個/s= $s^{-1}$  である。

元素の数  $N$  の時間  $t$  の経過による減少は、その時刻における元素の数  $N$  に比例する。この比例定数を壊変定数 (decay constant)  $\lambda$  という。

$$(\text{放射能}) = -\frac{dN}{dt} = \lambda N \quad (1.17)$$

この微分方程式を解くと

$$N(t) = N_0 e^{-\lambda t} \quad (1.18)$$

となる。ここで、 $N_0$  は、 $t=0$  での元素の数である。 $N = \frac{N_0}{2}$  となるまでの時間  $T$  を半減期 (half-life) という。

$$\frac{N_0}{2} = N_0 e^{-\lambda T} \quad (1.19)$$

より

$$\lambda T = \ln 2 = 0.693 \quad (1.20)$$

となる。

式 (1.20) を式 (1.17) に代入すると

$$(\text{放射能}) = -\frac{dN}{dt} = \frac{0.693}{T} N \quad (1.21)$$

が得られる。これは次節で使う。

また、式 (1.20) を式 (1.18) に代入すると

$$N(t) = N_0 \left(\frac{1}{2}\right)^{\frac{t}{T}} \quad (1.22)$$

が得られる。

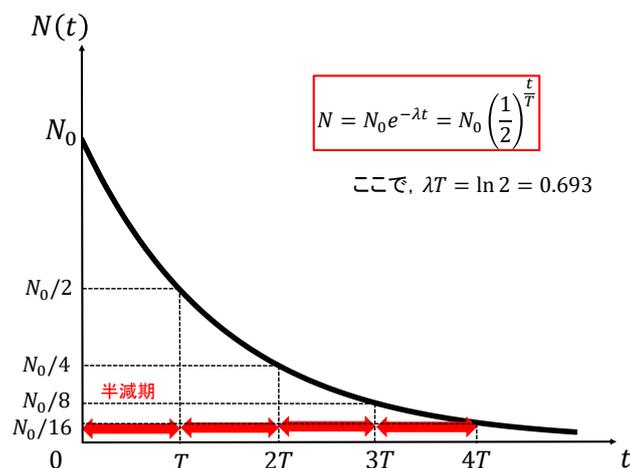


図 1.13: 壊変法則

式 (1.18), (1.22) を時刻  $t$  の関数としてグラフを描くと図のようになる。この図 1.22 より半減期の意味がはっきりすると思う。各原子核の半減期は、付録 C を参照すること。

## 1.7 放射能と質量

放射能の式 (1.21) は、原子核の個数  $N$  を使って表されている。しかし、一般に原子核の個数を数えることは不可能である。そこで、通常、質量で測ることになる。いま、放射性物質の粒子数が  $N$  個とし、その質量が  $m[\text{g}]$  だったとする。

	質量数		アボガドロ数
1 mol	...	$A[\text{g}]$	...
		$m[\text{g}]$	...
			$N_A$
			$N$

この比例式を使うと放射能の式 (1.21) は、

$$(\text{放射能}) = -\frac{dN}{dt} = \frac{0.693}{T} N = \frac{0.693}{T} \frac{m N_A}{A} \quad (1.23)$$

と表される。この式によって、放射性物質の質量 ( $m$ ) と放射能 ( $-dN/dt$ ) との関係がわかる。単位量あたりの放射能が便利なときもある。

1. 1 g あたりの放射能を比放射能という。式 (1.23) より

$$(\text{比放射能}) [\text{Bq/g}] = -\frac{\text{放射能}}{m} = \frac{0.693}{T} \frac{N_A}{A} \quad (1.24)$$

と書くことができる。

2. 1 mol あたりの放射能も用いられる。同じく式 (1.23) より

$$(1 \text{ mol あたりの放射能}) [\text{Bq/mol}] = -\frac{\text{放射能}}{N/N_A} = \frac{0.693}{T} N_A \quad (1.25)$$

と書くことができる。

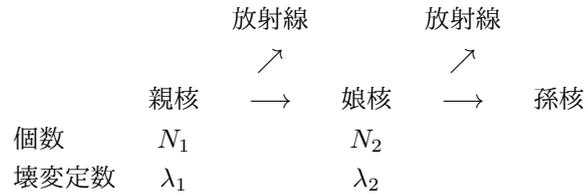
いずれの場合でも、半減期  $T$  の逆数に比例していることがわかる。つまり半減期  $T$  が短い核種の比放射能は大きくなる。

### 演習問題

1.  $^{226}\text{Ra}$  の半減期は 1600 年である。 $^{226}\text{Ra}$  の 1.0 g の放射能は何 Bq か。

## 1.8 放射平衡

ある核種が放射性で壊変を起こして別の核種となる。その核種がさらに放射性である場合、連続して放射線がでることとなる。



### §1.8.1 放射平衡

親核の個数  $N_1$  は、 $\lambda_1$  の割合で減少する。微分方程式は

$$\frac{dN_1}{dt} = -\lambda_1 N_1 \quad (1.26)$$

である。親核の減少は娘核の増加であり、娘核は  $\lambda_2$  の割合で減少する。娘核の個数を  $N_2$  とすると、

$$\frac{dN_2}{dt} = +\lambda_1 N_1 - \lambda_2 N_2 \quad (1.27)$$

となる。親核と娘核の時間変化は、式 (1.26), (1.27) の連立微分方程式を解くことになる。

まず、式 (1.26) を解く。これは前回の式 (1.17) と同じで、初期条件  $t = 0$  のとき  $N_1 = N_0$  とすると

$$N_1 = N_0 e^{-\lambda_1 t} \quad (1.28)$$

となる。これを式 (1.27) に代入した微分方程式は

$$\frac{dN_2}{dt} + \lambda_2 N_2 = \lambda_1 N_0 e^{-\lambda_1 t} \quad (1.29)$$

となる。これを解くのに、まず式 (1.29) の左辺をゼロとした同次方程式

$$\frac{dN_2}{dt} + \lambda_2 N_2 = 0 \quad (1.30)$$

を解く。これは式 (1.26) と同じ形なので、積分定数を  $C$  として

$$N_2 = C e^{-\lambda_2 t} \quad (1.31)$$

と解くことができる。ここで、定数変化法を用いる。すなわち、定数  $C$  を時刻  $t$  の関数  $C(t)$  とみなして、式 (1.31) を式 (1.29) に代入する。

$$\frac{dC}{dt} e^{-\lambda_2 t} = \lambda_1 N_0 e^{-\lambda_1 t} \quad (1.32)$$

を変形して、

$$\frac{dC}{dt} = \lambda_1 N_0 e^{(\lambda_2 - \lambda_1)t} \quad (1.33)$$

となる。これを解く。積分定数を  $C'$  として

$$C = \frac{\lambda_1 N_0}{\lambda_2 - \lambda_1} e^{(\lambda_2 - \lambda_1)t} + C' \quad (1.34)$$

これを式 (1.31) に戻すと

$$N_2 = \frac{\lambda_1 N_0}{\lambda_2 - \lambda_1} e^{-\lambda_1 t} + C' e^{-\lambda_2 t} \quad (1.35)$$

ここで娘核の初期条件  $t = 0$  のとき  $N_2 = 0$  とすると、

$$C' = -\frac{\lambda_1 N_0}{\lambda_2 - \lambda_1} \quad (1.36)$$

これを式 (1.35) に戻して

$$N_2 = \frac{\lambda_1 N_0}{\lambda_2 - \lambda_1} (e^{-\lambda_1 t} - e^{-\lambda_2 t}) \quad (1.37)$$

が最終の解となる。

### §1.8.2 過渡平衡

親核の半減期  $T_1$  が娘核の半減期  $T_2$  より長いとき,  $\lambda T = \ln 2$  であることより,

$$T_2 < T_1 \quad \text{または} \quad \lambda_2 > \lambda_1$$

のとき, 式 (1.37) の括弧内第2式は無視される. したがって, (1.28) より

$$N_2 = \frac{\lambda_1 N_0}{\lambda_2 - \lambda_1} e^{-\lambda_1 t} = \frac{\lambda_1}{\lambda_2 - \lambda_1} N_1 \quad (1.38)$$

となる. これを変形すると,

$$\frac{N_2}{N_1} = \frac{\lambda_1}{\lambda_2 - \lambda_1} = \frac{T_2}{T_1 - T_2} < 1 \quad (1.39)$$

これから, 放射能の比は

$$\frac{A_2}{A_1} = \frac{\lambda_2 N_2}{\lambda_1 N_1} = 1 + \frac{N_2}{N_1} > 1 \quad (1.40)$$

となる. また, 式 (1.39) を使って,

$$\frac{A_2}{A_1} = \frac{\lambda_2}{\lambda_2 - \lambda_1} = \frac{T_1}{T_1 - T_2} > 1 \quad (1.41)$$

と表すことができる. これより  $A_2 > A_1$  なので, このときは必ず娘核種の放射能のほうが大きい.

### §1.8.3 永続平衡

親核の半減期  $T_1$  が娘核の半減期  $T_2$  より非常に長いとき, すなわち

$$T_2 \ll T_1 \quad \text{または} \quad \lambda_2 \gg \lambda_1$$

のとき, 式 (1.38) の分母  $\lambda_1$  は無視される. したがって,

$$N_2 = \frac{\lambda_1}{\lambda_2} N_1 \quad (1.42)$$

となる. これを変形すると,

$$\frac{N_2}{N_1} = \frac{\lambda_1}{\lambda_2} = \frac{T_2}{T_1} \quad (1.43)$$

これから, 放射能の比は

$$\frac{A_2}{A_1} = \frac{\lambda_2 N_2}{\lambda_1 N_1} = 1 \quad (1.44)$$

となり, 放射能は等しく ( $A_1 = A_2$ ) なる.

## 1.9 放射線と物質との相互作用（総論）

放射線と物質との相互作用は、以下の目的のために重要である。

1. 放射線からの防護
2. 放射線の測定
3. 生体への影響（放射線治療も含む）

放射線が物質に与える影響としては次のものが考えられる。

1. 電離作用，励起・発光作用（図 1.2 参照）
2. 物質透過力

特に前者は放射線の測定に，後者は放射線防護や核医学について重要である。以下，各放射線についてみていこう。

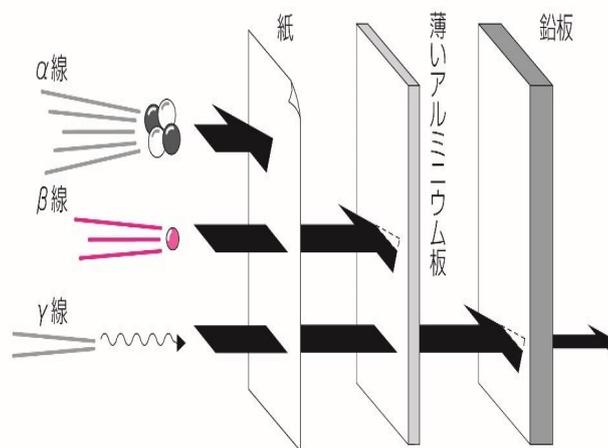


図 1.14: 放射線と物質との相互作用 [2]

### α 粒子

電荷は  $+2e$  と大きいため，物質を構成する分子の中の電子を電離しやすく，物質への影響は大きい。しかし，4つの核種から構成されるほどの大きさなので，物質と相互作用してすぐに停止してしまう。したがって，物質透過力は小さい。

### β<sup>-</sup> 粒子

電荷と粒子の大きさともに，α，β粒子の中間に位置するため，電離作用や物質透過力も中間に位置する。

### γ 粒子

電荷を持たないため，電子に直接ぶつければ影響はあるが，電離作用は小さい。逆に相互作用が小さいということは，物質透過力は大きくなる。

今までの話を表 1.5 にまとめておこう。そして，以下の節では，放射線と物質との相互作用を，荷電粒子と γ 線にわけて考えよう。

表 1.5: 放射線の特徴

	高 LET	低 LET	
	$\alpha$ 線	$\beta^-$ 線	$\gamma$ 線
本体	${}^4_2\text{He}$	$e^-$ (電子)	光子
電荷	$+2e$	$-e$	0
電離作用	大	中	小
物質透過力	小	中	大
遮蔽 (しゃへい)	紙 1 枚	プラスチック アルミニウム	鉛 コンクリート

## 1.10 荷電粒子と物質との相互作用

### §1.10.1 阻止能

放射線が物質に入射すると、徐々にエネルギーを失い、最後にはすべてのエネルギーを失って止まる。物質中 ( $dx$ ) を通る間に失うエネルギー ( $dE$ ) とすると、線阻止能  $S$  を

$$S = -\frac{dE}{dx} = S_{rad} + S_{col} \quad (1.45)$$

と定義する。この値が大きいほど、物質中で放射線が早くエネルギーを失って止まることを意味する。この線阻止能は、二つの和によって与えられる。

#### 1. 線制動放射阻止能 $S_{rad}$

荷電粒子が原子核の電場によって曲げられて、制動放射をしてエネルギーを失う。重荷電粒子のときは通常無視できる。

#### 2. 線衝突阻止能 $S_{col}$

物質を構成する電子との相互作用によってエネルギーを失う。原子の電離・励起によってエネルギーを失う。

荷電粒子が物質中の単位長さ当たり電子に与えるエネルギー、すなわち、物質が得るエネルギーのことを線エネルギー付与 (LET: linear energy transfer) という。

$$\text{LET} \sim S_{col} \quad (1.46)$$

であり、放射線生物学で重要な量となる。

### §1.10.2 衝突阻止能

荷電粒子の質量  $M$ 、電荷  $z$ 、速さ  $v$ 、エネルギー  $E = Mv^2/2$  とする。物質の原子番号  $Z$ 、質量数  $A$ 、電子の質量  $m$ 、密度  $\rho$  とする。このとき、衝突阻止能は以下に与えられる\*<sup>3</sup>。

$$S \propto \rho \frac{z^2 Z}{v^2 A} \propto \frac{Mz^2}{E} \quad (1.47)$$

衝突阻止能を物質の密度  $\rho$  で割ったものを質量衝突阻止能という。

$$S_m = \frac{S}{\rho} \quad (1.48)$$

これは物質に依存しない量となる。

\*<sup>3</sup>衝突する物質の原子番号  $Z$  が大きいほど、衝突阻止能は大きくなる。つまり、放射線をさえぎるためには、できるだけ大きな原子番号をもつ物質を使うと良い。安定同位体のある最大原子番号は鉛 Pb である。

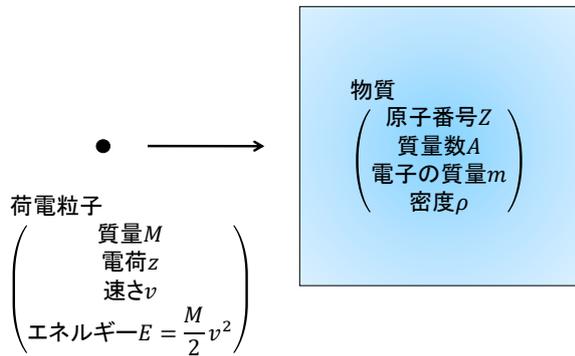


図 1.15: 荷電粒子と物質との衝突

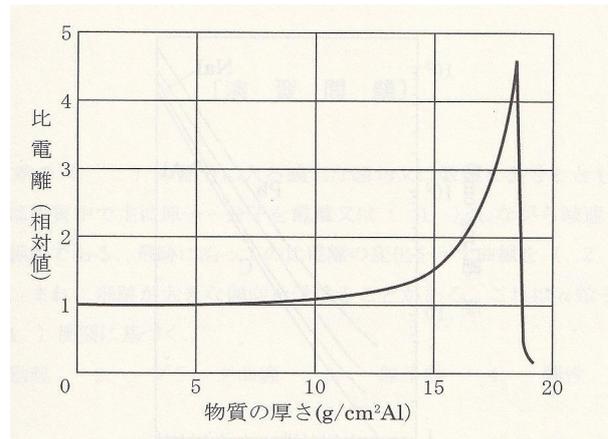


図 1.16: ブラッグ・ピーク [1]

### §1.10.3 飛程

荷電粒子が物質中で運動エネルギーを全部失い止まるまでに進む距離を飛程  $R[\text{cm}]$  という。

$$R \propto \int \frac{dE}{S} \propto \frac{E^2}{Mz^4} \propto \frac{Mv^4}{z^2} \quad (1.49)$$

飛程  $R$  と物質の密度  $\rho[\text{mg}/\text{cm}^3]$  の積を質量飛程  $[\text{mg}/\text{cm}^2]$  という。  $A$  を原子量とすると、次のブラッグ・クレーマン則が成り立つ。

$$R \times \frac{\rho}{\sqrt{A}} \sim \text{一定} \quad (1.50)$$

$\beta$  線のアルミニウム中での質量飛程  $[\text{g}/\text{cm}^2]$  は以下のように与えられている。

$$R = 0.542E - 0.133 \quad 0.8 \text{ MeV} < E \quad (1.51)$$

$$R = 0.407E^{1.38} \quad 0.15 \text{ MeV} < E < 0.8 \text{ MeV} \quad (1.52)$$

$\alpha$  線の空気中での飛程  $R[\text{cm}]$  は以下のように与えられている。

$$R = 0.318E^{1.5} \quad 4 \text{ MeV} < E < 7 \text{ MeV} \quad (1.53)$$

### §1.10.4 W 値

エネルギー  $E$  の荷電粒子が空気中で止まった時に生じるイオン数を  $N$  とすると、イオン対 1 個を作る平均エネルギー  $W$  は

$$W = \frac{E}{N} \quad (1.54)$$

で与えられる。

表 1.6: W 値

気体	$\alpha$ 線 [eV]	$\beta$ 線 [eV]
空気	35	34
ヘリウム	43	42
アルゴン	26	26
メタン	29	27

## 1.11 $\gamma$ 線と物質との相互作用

### §1.11.1 線減弱係数と半価層

物質に光子が照射されると、光子の減衰は指数関数的と仮定される。物質の厚さを  $x$  とすると、 $\gamma$ 線の強度  $I$  は線減弱係数  $\mu[\text{cm}^{-1}]$  を使って

$$-\frac{dI}{dx} = \mu I \quad (1.55)$$

と表すことができる。 $\gamma$ 線の入射強度を  $I_0$  として、この微分方程式を解けば、

$$I = I_0 e^{-\mu x} \quad (1.56)$$

となる。入射  $\gamma$ 線の強度が半分になる物質の厚さ  $X$  を半価層という。

$$\mu X = \ln 2 = 0.693 \quad (1.57)$$

の関係がある。

表 1.7: 光子の半価層と 1/10 価層 [cm]

エネルギー MeV	鉛		水	
	半価層	1/10 価層	半価層	1/10 価層
1	1.1	3.5	19	63
2	1.9	6.0	23	75

### §1.11.2 相互作用の種類

$\gamma$ 線が物質に照射されると、光子のエネルギーにより、光電効果・コンプトン効果・電子対生成が起こり、 $\gamma$ 線のエネルギーが失われる。

#### 光電効果：図 1.17

エネルギー  $h\nu$  の光子が、軌道電子にすべてのエネルギーを与え、自身は消滅し、軌道電子は原子の束縛から離れて自由電子となる。これを光電子という。これは入射光子のエネルギーが低い (0.5 MeV 以下) ときに優勢な相互作用である。

#### コンプトン効果：図 1.18

エネルギー  $E = h\nu$  の光子が、エネルギーの一部を電子に与え、自身は消滅せずに残る。散乱光子のエネルギーを  $E' = h\nu'$  とすると、 $\nu' < \nu$  または  $\lambda' > \lambda$  であり、散乱光子の波長は長くなる。エネルギーと運動量の保存則より、散乱角を  $\phi$  とすると

$$\Delta\lambda = \lambda' - \lambda = \frac{h}{m_e c} (1 - \cos\phi) \quad (1.58)$$

となる。ここで、 $m_e$  は電子の質量であり、 $c$  は光速である。また、エネルギーの変化は

$$E' = \frac{E}{1 + \frac{E}{m_e c^2} (1 - \cos\phi)} \quad (1.59)$$

で与えられる。この過程は、0.5~5 MeV で優勢な反応である。

なお、光のエネルギーが変化しない散乱をレイリー (トムソン) 散乱という。

#### 電子対生成：図 1.19

エネルギー  $h\nu$  の光子が原子核付近で消滅し、電子と陽電子が生成される。電子と陽電子の質量の和から、入射光子のエネルギーが 1.02 MeV 以上でないと起こらない。

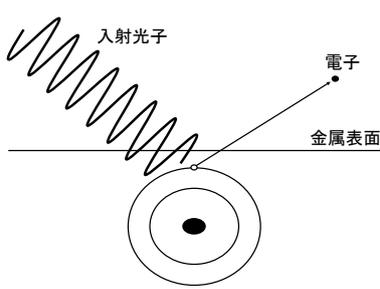


図 1.17: 光電効果

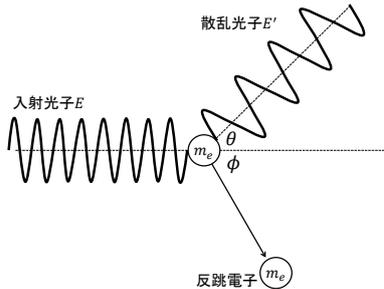


図 1.18: コンプトン効果

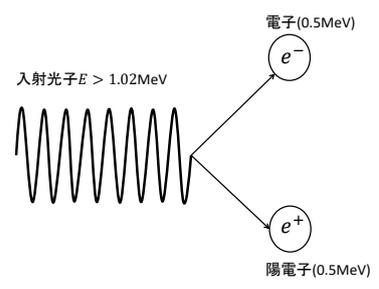


図 1.19: 電子対生成

### §1.11.3 相互作用と減弱係数

減弱係数を物質の密度で割ったものを質量減弱係数という。

$$\mu_m = \frac{\mu}{\rho} \tag{1.60}$$

減弱係数  $\mu$  は、 $\mu = \tau + \sigma + \kappa$  で表される。

表 1.8: 相互作用と減弱係数

	減弱係数	断面積	エネルギー
光電効果	$\tau$	$Z^5 E_\gamma^{-3.5}$	0.5 MeV 以下
コンプトン効果	$\sigma$	$Z^1$	0.5~5 MeV
電子対生成	$\kappa$	$Z^2$	1.02 MeV 以上

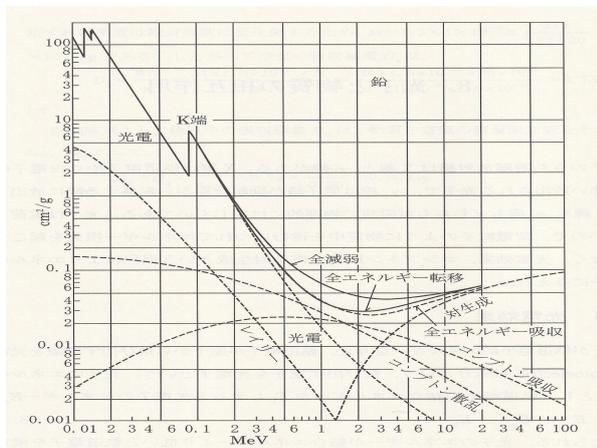


図 1.20: 鉛に対する光子の質量減弱係数 [1]

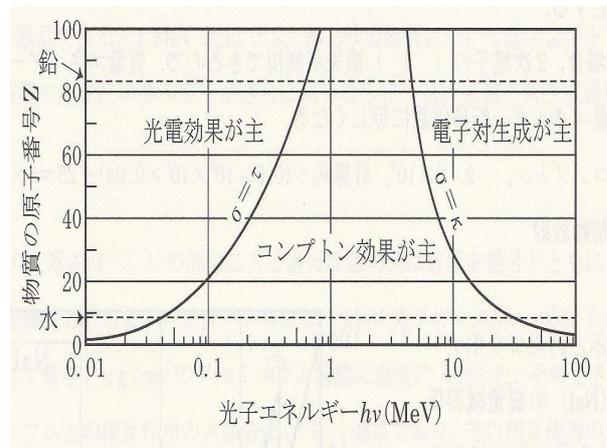


図 1.21: 水の実効原子番号は 7.5, 鉛の原子番号は 82 [1].

### §1.11.4 照射線量

質量  $dm$  の空気中に  $\gamma$ 線が入射し、 $\gamma$ 線のエネルギーがすべて失われるまでに生成するイオン対の電荷量を  $dQ$  とすると、

$$X = \frac{dQ}{dm} \text{ [C/kg]} \tag{1.61}$$

を照射線量という。放射線量ででてくる単位は表 A.1 にまとめた。

## 1.12 核反応，中性子と物質との相互作用

### §1.12.1 核反応

1898年ころに発見されたヘリウム原子核 ( ${}^4_2\text{He}$  または  $\alpha$  粒子) をラザフォードが物質にぶつけたのが始まりである。1919年に初めて行われた。



加速器を作り出したコッククロフトとワルトンは1932年に



の反応を起こさせた。同じ年、チャドウィックは中性子を発見する\*4。



### §1.12.2 中性子の分類と相互作用

中性子は、その速さ(エネルギー)によって以下のように分類される。

熱中性子	$E < 0.025 \text{ eV}$
熱外中性子	$0.1 \text{ eV} < E < 1 \text{ keV}$
高速中性子	$0.1 \text{ MeV} < E$

荷電粒子は電荷があるために原子核に近づくとクーロン力による反発が大きくなり、原子核から遠ざけられる。ところが中性子は電荷を持たないため、中性子は原子核に近づくことができる。そこで原子核が中性子を吸収または捕獲するという反応が起こる。ただし、速く動く中性子は捕獲され難いので、中性子を減速させ、熱中性子として捕獲されやすいようにする必要がある。例えば、コバルト60を生成するのに使われる。



これを次のようにも表す。



### §1.12.3 核分裂

この熱中性子を使えば、中性子を原子核に吸収させることができ、もっと大きな原子核ができると考えられた。ハーンとシュトラスマンは1938年に実験を行い、大きな原子核を作る代わりに核分裂を発見した。



また、ウラン238に中性子を吸収させると、次の反応が起こった。



このプルトニウム239もウラン235と同じ核分裂性核種であることがわかった。これら核分裂反応では、原子核が2個の原子核に分裂するのである。これらの原子核を核分裂生成物という。図1.22に見るように、これら核分裂性生成物は質量数が95と138付近の核種が生成される確率が高い。

\*4ちなみに同じ年、ディラックの予言(1928年)した陽電子も発見された。加速器、中性子、陽電子が見つかったこの年を「奇跡の年」と言われる所以である。

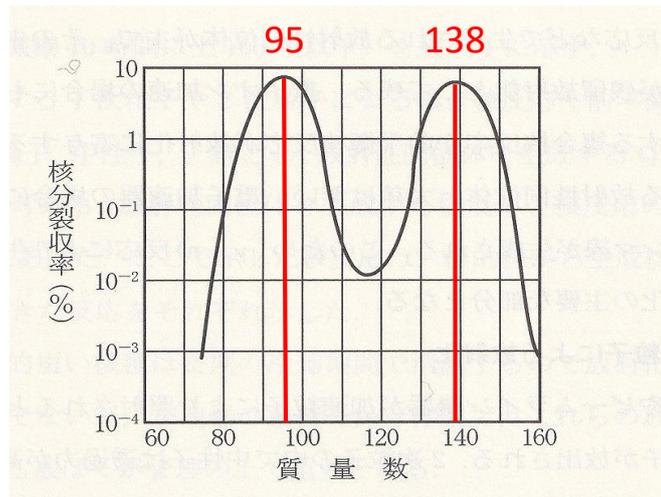


図 1.22: 熱中性子による  $^{235}\text{U}$  の核分裂の収量 [1]

#### §1.12.4 原子力

式 (1.67) の右辺で，2~3 個の中性子がでることがわかった．その中性子を別の  $^{235}\text{U}$  に吸わせれば，連続的に核分裂が起きる（連鎖反応という）ことになる．これを利用したのが原子爆弾であり原子力発電である．

式 (1.67) では，1 回の核分裂で 174 MeV のエネルギーが放出される．一般の化学反応が数 eV 程度であるので，いかに大きなエネルギーかが理解できる．このエネルギーで水を沸騰させ，その蒸気でタービンを回して電気を作るのが原子力発電である．

また，核分裂生成物は，長半減期の核種が多く，原子力発電から出されるこれらの核種を放射性廃棄物とよんでいる．これらを地層深く埋設し，半減期の 10 倍の期間管理する計画であるが，その場所すら未だ決定されていない．

## 第2章 放射線測定

### 2.1 概略

#### §2.1.1 目に見えないものを捕える

放射線は、見ることも触ることも匂いも味もない。人間の五感では捕えることができない。そこで、放射線が物質と相互作用することを利用して放射線が存在するかどうかを調べるわけである。その物理的背景(原理)となるものは、次の2つである。

##### 電離作用

放射線が空気中を通過すると、電離能力によりイオンが生ずる。そのイオンを電場をかけて集める。単位質量(1 kg)の空気に放射線を通過させ、生じたイオンの量を照射線量(exposure)という。したがって、単位は C/kg である。

##### 励起発光作用

放射線が原子の近くを通過すると、原子内の電子がエネルギーの高い準位に励起される。その電子は、自発的に低い軌道に移り、光を放出する。その光を捕えることによって、放射線が来たことを感知する。発光した光の多くは微弱なものなので、光子を倍増させて検知する。

#### §2.1.2 何を測定するのか？

放射線の測定も次の2つの内容がある。

##### 放射線の測定

放射線の種類やエネルギーを測定する。これがわかると、放射線を放出している核種や放射能(壊変率)がわかる。

##### 線量の測定

放射線を区別しないで、平均値として測定。例えば物質が吸収するエネルギー、生成する電気量、生物が受ける損傷など次の5つがある。

1. 吸収線量 [Gy=J/kg]  
ある物質が放射線から与えられるエネルギー
2. 線量等量 [Sv]  
放射線の種類による重みを加味したもの
3. 70  $\mu$ m, 3 mm, 1 cm 線量等量 [Sv]  
人の軟組織に等価な線量等量。それぞれ皮膚, 目, それ以外の臓器に対応する。
4. カーマ [Gy]  
物質中で非荷電粒子によってたたきだされたすべての荷電粒子の持つ運動エネルギーの合計。
5. 照射線量 [C/kg]  
空気中で光子によって生成するイオン対の全電荷量。

## 2.2 測定器の種類と特性

前節の物理的性質をいかして、種々の測定器がある。表 2.1 にまとめておこう。放射線の持つエネルギーによって、測定できないものもあるので、使用核種によって測定器を選択しなければならない。

表 2.1: 放射線の測定器

物質	測定器	測定対象	原理
気体	電離箱	$\gamma(1\mu\text{Sv/h}\sim)$	電離
	比例計数管	$\alpha$ , 低エネルギー $\beta$	
	GM 計数管	高エネルギー $\beta$ , $\gamma(0.1\mu\text{Sv/h}\sim)$	
固体	半導体検出器	$\gamma$ , エネルギー分解能が良い	蛍光
	NaI シンチレーションカウンタ	$\gamma(0.01\sim 30\mu\text{Sv/h})$	
液体	液体シンチレーションカウンタ	低エネルギー $\beta$	

## 2.3 気体の検出器

電離現象を利用している。放射線が気体を電離し、電場によってイオンを回収する。電場を作るためにかける電圧によって、以下の種類がある。

### §2.3.1 電離箱

- $\gamma$  線による放射線の強さの測定
- 空気の W 値は、約 34 eV である。表 1.6 参照。
- 電離箱に  $Q$  [C] の電荷が流れたとすると、電離箱内に生成したイオン対の数  $N$  は、電子の電荷を  $e$  [C] とすると

$$N = \frac{Q}{e} \tag{2.1}$$

である。電離箱内の気体の質量を  $m$  [kg] とすると、気体の吸収線量  $D$  [Gy=J/kg] は、

$$D = \frac{WN}{m} = \frac{WQ}{me} \tag{2.2}$$

と表すことができる。

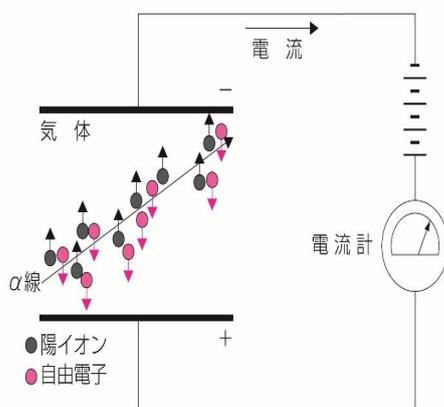


図 2.1: 電離箱の原理 [2]

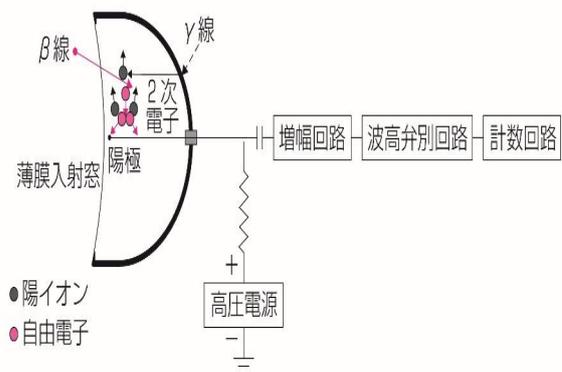


図 2.2: GM 計数管の原理 [2]

### §2.3.2 GM 計数管

- 数え落とし
- 幾何学的効率

### §2.3.3 比例計数管

- 気体中に発生したイオンは、電極に加速される途中で他のガス分子に衝突する。衝突により新たなイオンが生ずる。これを電子なだれという。放射線による電離以上のイオンが集まるので、ガス増幅という。
- 比例領域では、最初に発生したイオン対に比例するイオンが電極に集まる。
- 測定試料を計数管内に直接挿入するので、飛程の短い  $\alpha$  線や低エネルギー  $\beta$  線の測定が可能である。

## 2.4 固体，液体の検出器

### §2.4.1 半導体検出器

- 半導体が放射線によって電子-正孔対を作ること利用した検出器である。
- 電子-正孔対を生成するのに、ゲルマニウム半導体で 3.0 eV，シリコン半導体で 3.6 eV である。
- 空気のときの約 30 eV と比較して小さいので、エネルギー分解能がよい。

### §2.4.2 シンチレーション・カウンタ

- シンチレータの励起作用を利用している。
- $\gamma(X)$  線によってシンチレータが励起し、基底状態にもどるときに発する光を測定する。一般的にこの光は微弱なため、光電子増倍管によって光を電子に変換して増幅する。
- シンチレータとしては、個体 (NaI) や液体のものがある。特に低エネルギー  $\beta$  線の計測に有利で、 $^3\text{H}$  では唯一の手段である。

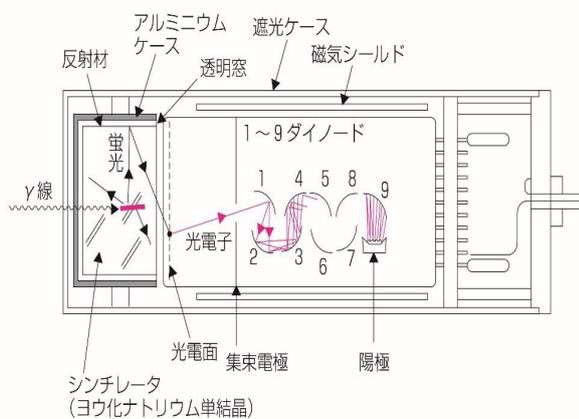


図 2.3: NaI(Tl) シンチレーション検出器 [2]

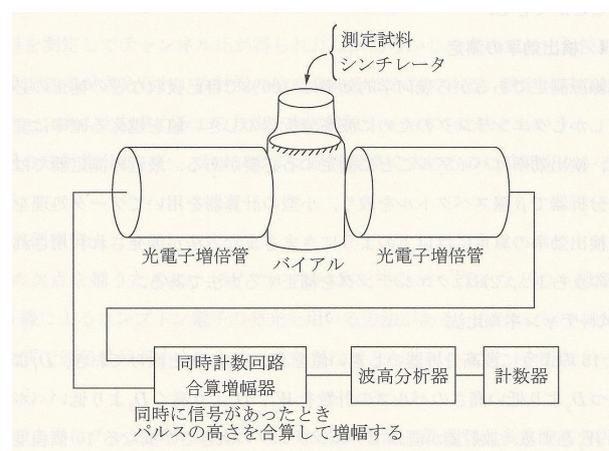


図 2.4: 液体シンチレーションカウンタの構造 [1]

## 2.5 個人の被曝線量の測定器

### §2.5.1 測定器の種類

大きく分けて積分型と直読式に分類される。

- 積分型
  - 蛍光ガラス線量計
  - OSL(Optically Stimulated Luminescence)
  - TLD(熱蛍光線量計)
  - フィルムバッチ
- 直読式
  - 電子式ポケット線量計

### §2.5.2 測定部位

男性は胸部，女性は腹部に装着して測定する。

## 2.6 測定値の取扱い

放射性核種は，いつ壊変するのかわかる確率的問題であり全くわからない。実際の計測では，ある値を中心にしてばらついた値になる。これらの変動を取り扱う数学的モデルとして，

- 二項分布

$$p(x) = {}_n C_x p^x (1-p)^{n-x} \quad (2.3)$$

- ポアソン分布

$$p(x) = \frac{m^{-x}}{x!} e^{-m} \quad (2.4)$$

- 正規(ガウス)分布

$$p(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi m}} e^{-\frac{(x-m)^2}{2\sigma}} \quad (2.5)$$

などがある。ここで， $m$  は，分布の平均値である。これらの分布の中では，ガウス分布がよく使われる。

ガウス分布は，2つの数すなわち平均値  $m$  と分散  $\sigma$  によって表される分布である。

$$p(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma}} e^{-\frac{(x-m)^2}{2\sigma}} \quad (2.6)$$

この分布は平均値  $m$  の周りにばらつき，

- $m \pm \sigma$  の範囲に 68.26 %
- $m \pm 2\sigma$  の範囲に 95.44 %
- $m \pm 3\sigma$  の範囲に 99.73 %

が入る。

### §2.6.1 誤差の伝搬

バックグラウンドならびに測定試料を計数したら、以下の計数値を得たものとする。

	計数時間	計数値と誤差	計数率と誤差
測定試料	$t$	$N \pm \sqrt{N}$	$\frac{N}{t} \pm \frac{\sqrt{N}}{t}$
バックグラウンド	$t_b$	$N_b \pm \sqrt{N_b}$	$\frac{N_b}{t_b} \pm \frac{\sqrt{N_b}}{t_b}$

このとき、正味の計数率

$$\frac{N}{t} - \frac{N_b}{t_b} \quad (2.7)$$

のもつ誤差  $\sigma_n$  は

$$\sigma_n = \sqrt{\left(\frac{\sqrt{N}}{t}\right)^2 + \left(\frac{\sqrt{N_b}}{t_b}\right)^2} = \sqrt{\frac{N}{t^2} + \frac{N_b}{t_b^2}} \quad (2.8)$$

となる。さらに、

$$\frac{\sqrt{N}}{N} \quad (2.9)$$

で表されるものを計測誤差という。

## 2.7 放射線測定実習

ここで用いられる放射線源の壊変図を下に掲げる.

植物の三大栄養素は, K, N, P である. つまり, カリウムは, 全ての植物に含まれている.

### カリウム40 (天然存在度 0.0117%)

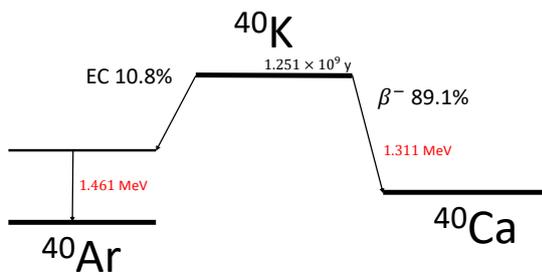


図 2.5: カリウム 40

### トリウム232 (天然存在度 100%)

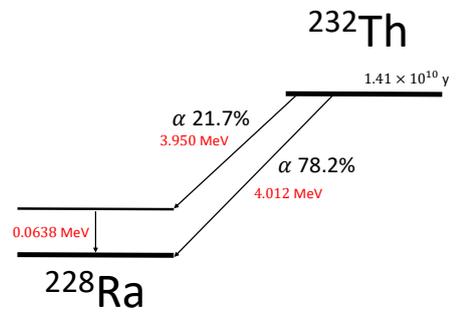
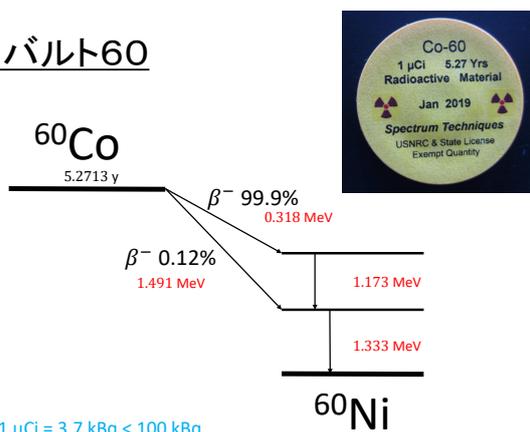


図 2.6: トリウム 232

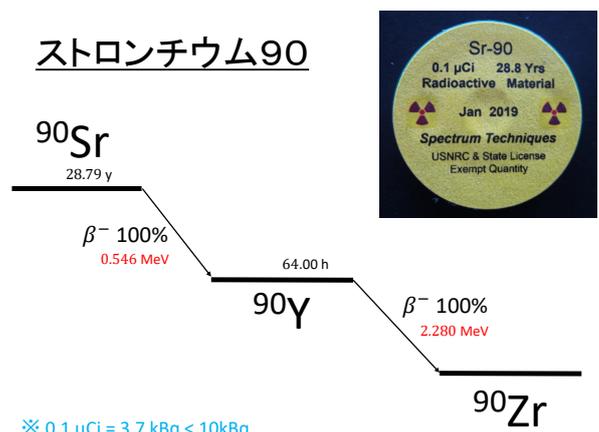
### コバルト60



※ 0.1 μCi = 3.7 kBq < 100 kBq

図 2.7: コバルト 60

### ストロンチウム90



※ 0.1 μCi = 3.7 kBq < 10kBq

図 2.8: ストロンチウム 90

# 第3章 放射線生物学

放射線生物学は、原子・分子、細胞、組織・臓器、個体の各レベルごとに整理するとわかりやすい。

## 3.1 放射線影響の分類

放射線影響の全体構成を図 3.1 にまとめる。生物は放射線によって原子・分子レベルで損傷を受けても、自己修復機能によって元通りに直すことができる。しかし、細胞レベルで修復が出来なければ、それが個体の影響として現れる。

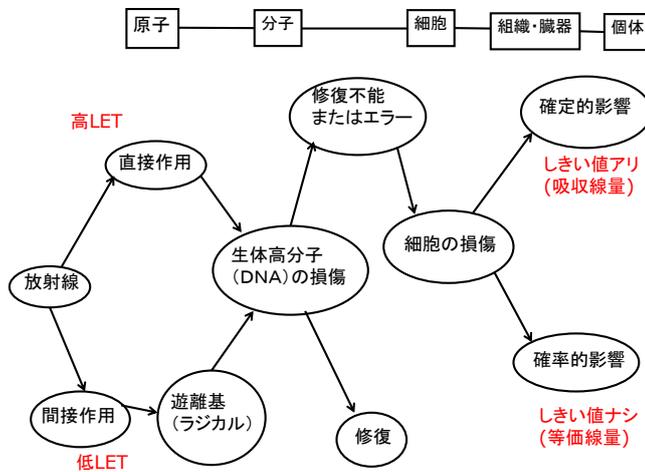


図 3.1: 放射線影響の分類

このとき、一定量を被曝すると必ず影響が出る線量をしきい値という。しきい値のある影響を確定的影響という。図 3.2 に見るように、しきい値を超える被曝をすれば、ほぼ 100%の人に影響が現れる。

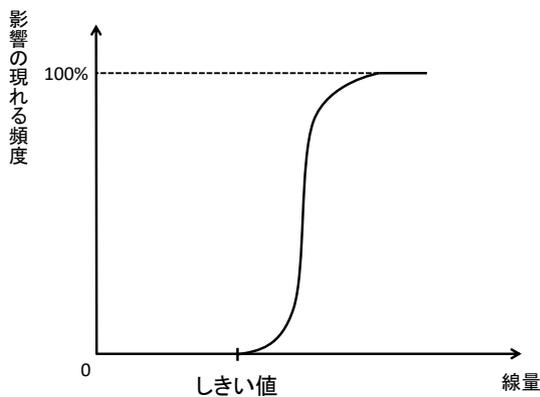


図 3.2: 確定的影響

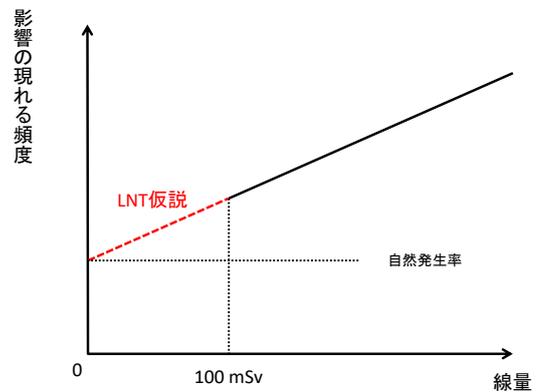


図 3.3: 確率的影響

これに対し、しきい値のはっきりしない影響を確率的影響という。図 3.3 に見るように、100 mSv を超える被曝をすれば影響が出るが、それ以下では影響の出現がはっきりしない。これを直線で結ぶのを LNT 仮説 (Linear Non-Threshold) とよぶ。この直線より下になる、つまり少量の放射線は健康に良いという考えもある。放射線ホルミシスという。

個体に現れる影響を表 3.1 にまとめよう。この表は、まるごと覚えよう。

表 3.1: 放射線の影響

身体的影響	早期影響 (数週間以内)	脱毛, 嘔吐, 精子減少 白血球減少, 不妊	確定的影響 《しきい値アリ》	吸収線量 [Gy]
	晩発影響 (数ヶ月以上)	再生不良性貧血, 白内障, 寿命短縮 胎児の影響, 染色体異常 癌, 白血病		
遺伝的影響			確率的影響 《しきい値ナシ》	等価線量 [Sv]

### 3.2 放射線に関する単位

放射線生物学で使われる単位を列挙しよう。放射線ででてくる国際単位は表 A.1 にまとめた。

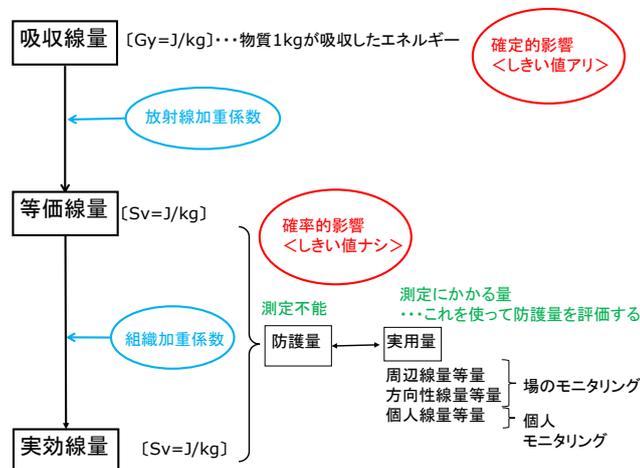


図 3.4: 放射線に関する単位

#### 吸収線量

物質の単位質量 (1 kg) あたりに吸収された放射線のエネルギーを吸収線量 (absorbed dose)  $D$  という。単位は J/kg であるが、これに特別な名称グレイ (Gray \*<sup>1</sup>記号 Gy) をあてる。

#### 等価線量

上の吸収線量  $D$  は、物質が吸収した放射線のエネルギーであり、物理的な量である。しかし、放射線には、 $\gamma$  線以外にも、 $\alpha$  線や中性子などがある。そして、線種によって与えられる寄与が違ふ。したがって、 $\gamma$  線以外の放射線を  $\gamma$  線に換算するレートが決められている。それを放射線加重係数 (radiation weighting factor)  $w_R$  という。こうして線種による重み付けをされた値を等価線量 (equivalent dose)  $H$  という。放射線加重係数は単位はないので、等価線量も吸収線量と同じ J/kg であるのだが、放射線防護に関する単位となるため、特別な名称シーベルト (Sievert \*<sup>2</sup>記号 Sv) をあてる。等価線量は、確定的影響を評価するのに用いられる。

$$H = w_R D \text{ [Sv]} \tag{3.1}$$

放射線加重係数 (ICRP2007 年勧告) を表 3.2 にまとめておこう。

\*<sup>1</sup>Gray, Louis Harold イギリス 1905~1965. 評伝に [3] がある。

\*<sup>2</sup>Sievert, Rolf スウェーデン 1886~1966. 評伝に [4] がある。

表 3.2: 放射線加重係数 (ICRP2007 年勧告)

放射線の種類	エネルギー範囲	放射線加重係数 $w_R$
$\gamma$ 線, $\beta$ 線, $\mu$ 粒子		1
陽子, 荷電 $\pi$ 粒子		2
$\alpha$ 線, 重荷電粒子		20
中性子線	~ 10 keV	2.5
	10 keV ~ 1000 MeV	2.5~20
	1000 MeV ~	2.5

### 実効線量

放射線による被曝（ひばく）を受けたとき、体の組織によって感受性の高低が存在する。この臓器による重みを組織加重係数  $w_T$  という。被曝に対する単位は、この重みをつけた実効線量 (effective dose)  $E$  によって表わされる。単位は Sv(シーベルト) = J/kg である。実効線量は、確率的影響を評価するのに用いられる。

$$E = w_T H = w_T w_R D \text{ [Sv]} \quad (3.2)$$

組織加重係数 (ICRP2007 年勧告) を表 3.3 にまとめておこう。

表 3.3: 組織加重係数 (ICRP2007 年勧告)

組織・臓器	組織加重係数 $w_T$	$\Sigma w_T$
骨髄, 大腸, 肺, 胃, 乳房, 残りの組織	0.12	0.72
生殖腺	0.08	0.08
膀胱, 食道, 肝臓, 甲状腺	0.04	0.16
骨表面, 脳, 唾液腺, 皮膚	0.01	0.04
合計		1.00

## 3.3 原子・分子レベルの影響と修飾要因

### §3.3.1 直接作用と間接作用

1. 直接作用：高 LET(陽子, 中性子,  $\alpha$  線) 放射線が、直接、原子・分子を電離する。
2. 間接作用：低 LET( $\beta$  線,  $\gamma$ (X) 線) が、水分子を電離する。



ここで  $\text{OH}^*$  をラジカルといい、このラジカルが生体高分子と反応して影響を与える。

### §3.3.2 間接作用の修飾要因

1. 希釈効果：溶質の濃度を低くすると、放射線の影響が大きくなる。
2. 酸素効果：酸素存在下での放射線の影響は大きくなる。酸素分子が電子を取り込んでラジカルとなるから。酸素増感比 (OER: Oxygen Enhancement Ratio) によって表わす。

$$\text{OER} = \frac{\text{無酸素下である効果を引き起こすのに必要な線量}}{\text{酸素下で同じ効果を引き起こすのに必要な線量}} \quad (3.3)$$

3. 生物学的効果比：放射線の線質の違い、すなわち LET の違いによる影響の違いを表す指標。RBE(Relative Biological Effectiveness) という。基準放射線は X( $\gamma$ ) 線であり、RBE=1 となる。

$$\text{RBE} = \frac{\text{ある生物効果を引き起こすのに必要な基準放射線の吸収線量}}{\text{同じ効果を引き起こすのに必要な試験放射線の吸収線量}} \quad (3.4)$$

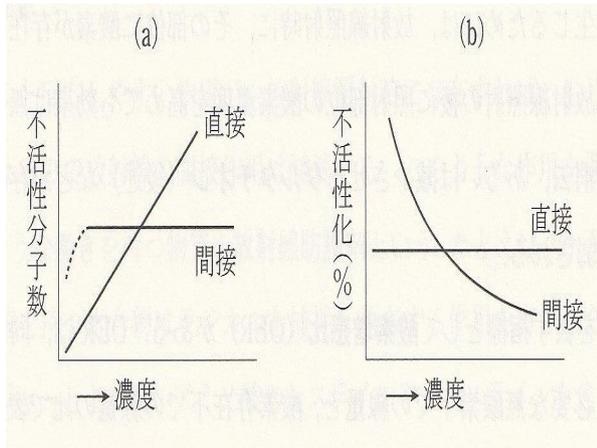


図 3.5: 希釈効果を示す濃度-効果曲線 [1]

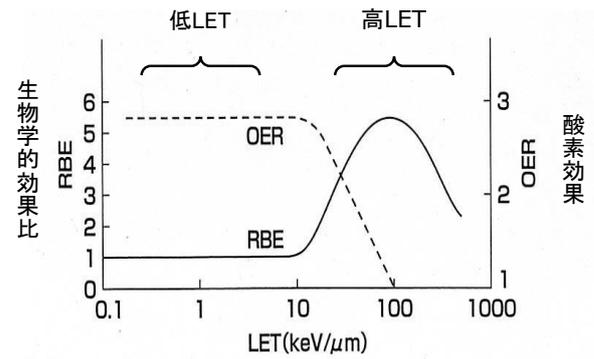


図 3.6: LET に対する RBE および OER の関係 [6]

4. 保護効果：ラジカルと反応しやすい物質を混ぜると間接作用の働きをおさえることができる。この物質を放射線防護剤 (ラジカルスカベンジャー) という。

5. 温度効果：温度が低いときのほうが、ラジカルの運動が不活発になり、放射線の影響が減少する。

### 3.4 細胞レベルの影響

#### §3.4.1 細胞死

細胞がある程度の放射線照射を受けると細胞死が起こる。細胞死は、その形態と細胞周期の観点から分類される。

##### 1. 細胞死の形態から

- (a) ネクロシス…病的で受動的な死
- (b) アポトーシス…生理的で能動的な死

##### 2. 細胞周期の観点から

- (a) 分裂死 (増殖死) …活発に細胞分裂している細胞が、放射線照射を受けたのちに数回の分裂を経て死に至る。巨細胞が形成されたり、細胞同士で融合が起きたりする。
- (b) 間期死…もう細胞分裂しない細胞に現れ、間期にある細胞が放射線照射を受けたのち、分裂することなく死に至る。

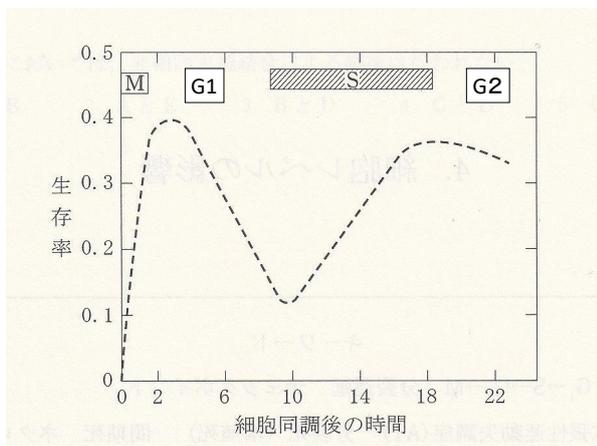


図 3.7: 細胞周期による放射線感受性の変化 [1]

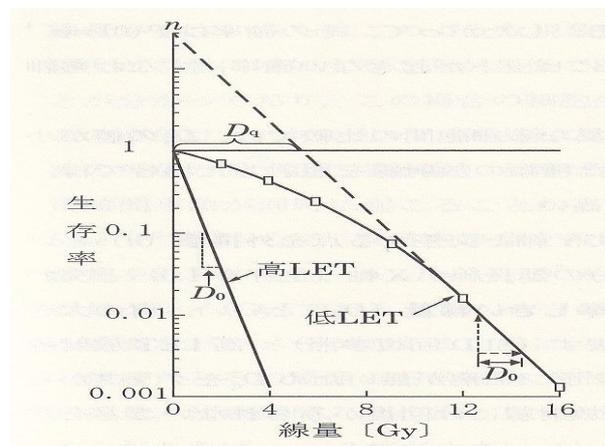


図 3.8: 細胞の生存率曲線 [1]

### §3.4.2 標的説と生存率曲線

細胞内には、細胞としての機能を維持するための必要不可欠な構造体（標的／ターゲット）があって、このターゲットがヒットされると細胞死が起こると考える説を標的説という。

#### 1. 1 標的 1 ヒットモデル：高 LET

細胞内には標的は 1 つしかないとし、その標的にヒットを 1 つでも受けたら細胞死が起こる。

#### 2. 多標的 1 ヒットモデル：低 LET

細胞内には標的が多数あり、全てがヒットされなければ細胞死は起こらない。

### §3.4.3 損傷からの回復

細胞が受けた損傷からの回復には、次の 2 つがある。

#### 1. SLD 回復（sub-lethal damage：亜致死損傷）

低 LET 放射線の分割照射を行い、1 回目の照射で細胞死に至らなかった細胞の損傷は、全て回復する。高 LET 放射線では、SLD 回復はほとんどない。

線量率効果：同一線量が照射される時、高線量で短時間に照射するより、低線量で長時間にわたって照射した方が影響は小さい。

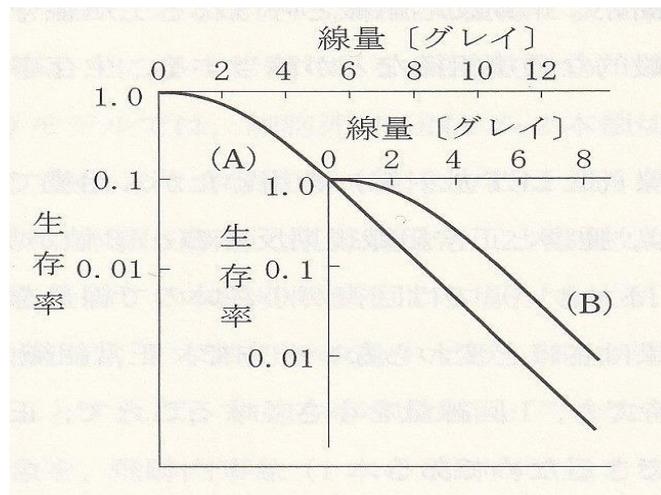


図 3.9: 2 分割照射による亜致死損傷からの回復 [1]

#### 2. PLD 回復（potentially lethal damage：潜在的致死損傷）

本来死に至る細胞が、照射後に置かれる状況によって回復する場合がある。高 LET では、PLD 回復はないか小さい。照射後 1 時間以内に回復するものと、2~6 時間かけて回復するものがある。したがって、6 時間以上経過してから条件を変えても PLD 回復はない。

## 3.5 組織・臓器レベルの影響

### §3.5.1 放射線感受性

放射線感受性は、

1. 細胞分裂の頻度が高い細胞
2. 将来行う細胞分裂の数が多い細胞
3. 形態・機能が未分化な細胞

ほど高いと考えられる。これをベルゴニー・トリポンドーの法則という。成人の組織・臓器別の放射線感受性を表 3.4 にまとめておこう。細胞再生系は、常に盛んな細胞分裂を行い、細胞が新しく作られている組織や臓器である。潜在的再生系は、普段はあまり分裂をしないが、損傷などを受けると分裂を開始する組織や臓器である。非再生系は、一度出来上がった後は全く分裂しない組織や臓器である。

小児・胎児は活発な成長・発達をしており、将来行う細胞分裂の数も多いので、細胞再生系に限らず高感受性である。

表 3.4: 放射線感受性

放射線感受性	高	細胞再生系	造血組織 生殖腺 消化管 体表, 眼	リンパ組織, 骨髄 精巣, 卵巣 腸 皮膚, 毛のう, 水晶体
		↓	潜在的再生系	内臓 腺 甲状腺
	低	非再生系	支持 神経	骨, 血管, 結合組織, 脂肪組織, 筋肉 神経

以下ででてくる線量は、X 線や  $\gamma$  線のように低 LET 放射線を照射した場合の吸収線量である。高 LET 放射線では、これらの値を RBE で割った値が対応する線量とする。

### §3.5.2 造血組織および血液

血液の放射線影響のしきい値を下表にまとめておこう。

赤血球 (1Gy 以上)		
白血球	リンパ球 (0.25Gy)	
	顆粒球 (0.5Gy)	好酸球
		好中球
		好塩基球
	単球	
血小板 (1Gy)		

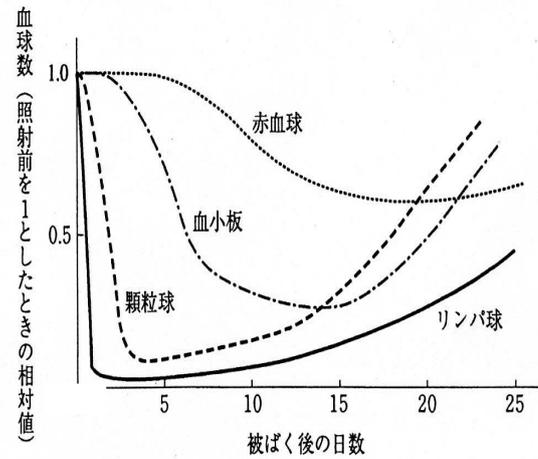


図 3.10: 数 Gy 被曝後の血球数の経時変化 [1]

リンパ球のしきい値は 0.25 Gy であり、被曝後すぐにアポトーシスを起こす。したがって、被曝するとすぐにリンパ球の減少が認められる。

### §3.5.3 生殖腺

放射線の生殖腺に対するしきい値を表 3.5 にまとめておこう。生殖腺では、低線量では一時不妊が起こるが回復する。高線量となると永久不妊が起こる。

表 3.5: 生殖腺の放射線影響

	一時不妊	永久不妊
精巣	0.15 Gy	3.5~6 Gy
卵巢	0.65~1.5 Gy	2.5~6 Gy

§3.5.4 小腸 (1cm) と皮膚 (70 $\mu$ m)

小腸の吸収上皮細胞を作るところをクリプトというが、10Gy で細胞死が起こる。このクリプトが体表面から 1 cm 下にあると見積もられている。

皮膚の下 70  $\mu$ m に皮下組織があり、ここを放射線からダメージを受けると皮膚が生産されなくなる。

線量 [Gy]	放射線影響
3	脱毛
3~6	紅斑, 色素沈着
7~8	水泡形成
10~	潰瘍形成
20~	難治性潰瘍 (皮膚がんへの移行)
30~	壊死

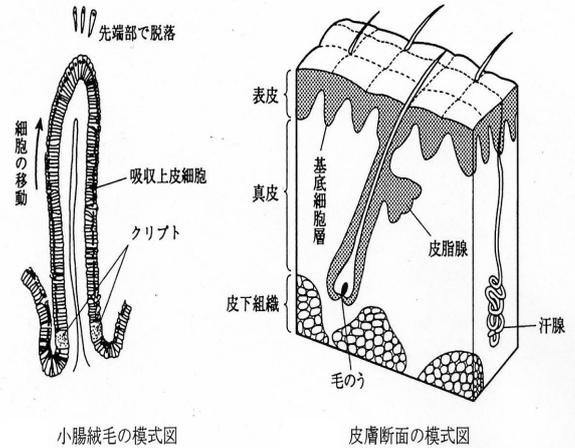
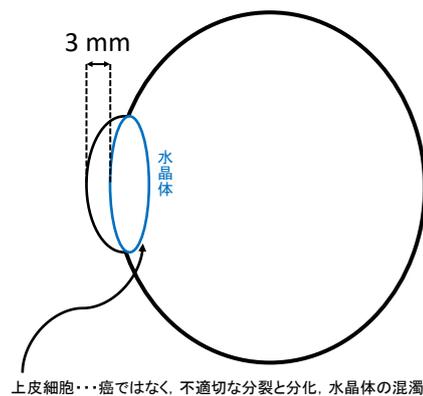


図 3.11: 小腸と皮膚の断面図 [1]

§3.5.5 水晶体 (3mm)

眼球表面より 3 mm 下に放射線が照射されると、白濁が起こる。

	1 回照射	慢性被曝
水晶体混濁	2 Gy	5 Gy
白内障	5 Gy	8 Gy



上皮細胞・・・癌ではなく、不適切な分裂と分化、水晶体の混濁

図 3.12: 目の模式図

### 3.6 個体（胎児を含む）レベルの影響

#### §3.6.1 線量と死亡率

被曝した個体の半数が一定期間に死亡する線量を半数致死線量といい、 $LD_{50(60)}$  と表す。( )内は、被曝してからの観察期間（日数）である。被曝した個体すべてが死亡する線量を全数致死線量といい、 $LD_{100(30)}$  と表す。表 3.6 にまとめておこう。

表 3.6: 放射線障害

吸収線量 [Gy]	影響
1	嘔吐, 放射線宿酔
1.5	死亡しきい値 (骨髄死)
3~5	被曝した半数が死亡 $LD_{50(60)}$
7~10	被曝した全数が死亡 $LD_{100(30)}$

#### §3.6.2 急性放射線死

1. 骨髄死…白血球の減少による抵抗力の低下, 血小板の減少による出血性傾向の増大が起こる。
2. 腸死…小腸クリプト細胞の吸収上皮細胞の細胞死による脱水症状が起こる。

表 3.7: 急性全身被曝による死亡に関する線量と生存期間

全身吸収線量 [Gy]	影響	被曝から死亡するまでの期間
4	骨髄死 $LD_{50(60)}$	数週間
約 10	腸死	10 日
50~100 以上	中枢神経死	1~2 日

#### §3.6.3 胎児への影響

胎児は一個体とみなされるので、胎児への影響は遺伝的影響ではなく、身体的影響に分類される。表 3.8 にまとめておこう。

表 3.8: 胎児の放射線障害

胎生期の区分	期間	発生する影響	しきい線量 [Gy]
着床前期	受精 8 日まで	胚死亡	0.1
器官形成期	受精 9 日~8 週	奇形 (小頭症)	0.15
胎児期	受精 8 週~25 週	精神発達遅滞	0.2~0.4
	受精 8 週~40 週	発育遅延	0.5~1.0

#### 演習問題

前節とこの節で出てきたしきい値を、一枚の片対数グラフにまとめなさい。

### 3.7 内部被曝

図 3.13 に見るように、体外に存在する放射性物質からの放射線から被曝することを外部被曝という。これらは遮蔽することにより防ぐことが可能である。このとき、 $\alpha$  線のように飛程の短い核種は遮蔽物がなくても、空気中で止まってしまうため、あまり重要ではない。

しかし、放射性物質が体内に入ると、その挙動により放射線の影響が外部被曝の場合と異なることになる。これを内部被曝とよぶ。内部被曝では放射性物質が臓器や組織に張り付いて放射線をだすため、飛程は短いが電離作用の強い  $\alpha$  線が重要となる。要点をまとめておこう。

#### 外部被曝

- 体外にある線源から放射線を被曝する。
- 密封線源でも非密封線源でも起こる。
- $\alpha$  線は飛程が短いので重要ではない。式 (1.53) 参照。

#### 内部被曝

- 放射性物質が体内に取り込まれ、体内にある線源から放射線を被曝する。
- 非密封線源のみ起こる。
- $\alpha$  線や  $\beta$  線が重要である。表 1.5 参照。

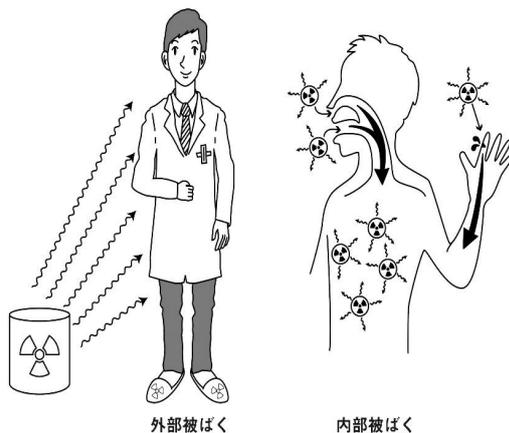


図 3.13: 外部被曝と内部被曝 [2]

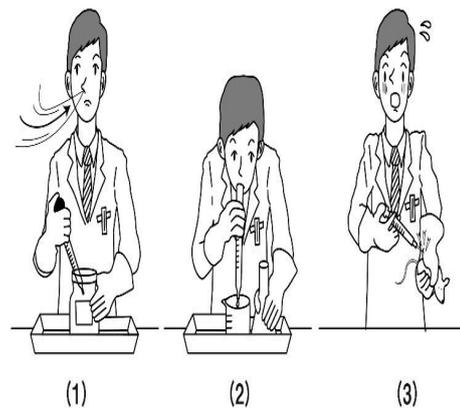


図 3.14: 体内摂取の経路 [2]

#### §3.7.1 放射性物質の体内への摂取経路

非密封線源を扱うときは、液体状の放射性物質が蒸発などにより気体状になったりするため、体内に取り込まれる危険性がある。図 3.14 に見るように、体内に取り込まれる経路として、以下のものが考えられる。

- (1) 呼吸器を通しての吸入摂取
- (2) 口、消化管を通しての経口摂取
- (3) 皮からの吸収や傷口を通しての経皮摂取

### §3.7.2 臓器親和性

体内に取り込まれた放射性物質は、その化学形によって集積する臓器が異なる。表 3.9 にまとめておこう。付録 C にも掲載してある。

表 3.9: 集積臓器, 核種および障害

集積臓器	核種	発生する影響
骨	$^{45}\text{Ca}$ , $^{90}\text{Sr}$ , $^{226}\text{Ra}$ , $^{241}\text{Am}$	白血病 (骨髄が照射されるため)
骨髄	$^{55}\text{Fe}$	白血病
甲状腺	$^{125}\text{I}$ , $^{131}\text{I}$	甲状腺がん
肺	$^{239}\text{Pu}$ , $^{222}\text{Rn}$	肺がん
肝臓, 脾臓	$^{60}\text{Co}$	
全身	$^3\text{H}$ , $^{137}\text{Cs}$	突然変異, 白血病, 不妊

### §3.7.3 放射性物質の体内動態

体内に取り込まれた放射性物質は、種々の臓器・組織に分布し、その後排泄される。排泄は、尿・大便・呼吸・汗など様々である。これらを生物学的減少といい、減少が指数関数的と仮定し、体内量が2分の1になるまでの時間を生物学的半減期  $T_b$  という。

放射性物質の体内量の減少は、

1. 放射性壊変による物理的減衰…物理学的半減期  $T_p$
2. 排泄機構による生物学的減少…生物学的半減期  $T_b$

の2つに支配されている。この両者による体内量の減少を表すものを有効半減期  $T_{\text{eff}}$  という。

$$\frac{1}{T_{\text{eff}}} = \frac{1}{T_p} + \frac{1}{T_b} \quad (3.5)$$

表 3.10: 主な核種の体内動態

核種	臓器・組織	物理的半減期	生物学的半減期	実効半減期
$^3\text{H}$	全身	12.33 y	12 d	12 d
$^{22}\text{Na}$	全身	2.609 y	11 d	11 d
$^{32}\text{P}$	骨	14.26 d	1155 d	14.1 d
$^{35}\text{S}$	精巣	87.51 d	90 d	44.4 d
$^{60}\text{Co}$	全身	5.271 y	9.5 d	9.5 d
$^{65}\text{Zn}$	全身	244.3 d	933 d	194 d
$^{89}\text{Sr}$	骨	50.53 d	$1.8 \times 10^4$ d	50.4 d
$^{90}\text{Sr}$	骨	28.74 y	$1.8 \times 10^4$ d	18.2 y
$^{131}\text{I}$	甲状腺	8.021 d	138 d	7.6 d
$^{137}\text{Cs}$	全身	30.04 y	70 d	70 d
$^{140}\text{Ba}$	骨	12.75 d	65 d	10.7 d
$^{226}\text{Ra}$	骨	1600 y	$1.64 \times 10^4$ d	43.7 y
$^{238}\text{U}$	腎臓	$4.468 \times 10^9$ y	15 d	15 d
$^{239}\text{Pu}$	骨	24110 y	$7.3 \times 10^4$ d	198 y

### §3.7.4 体内除染材

体内に放射性物質を取り込んだ場合、すみやかに除染材を投与する。表 3.11 に見るように、摂取した放射性核種により除染材を選ぶことになる。

表 3.11: 体内除染材

核種	薬剤
Cs	プルシアンブルー
U や Pu などの超ウラン元素	Ca-DTPA, Zn-DTPA
I	ヨウ化カリウム
Ra	アルギン酸ナトリウム
Pb, Hg, Po, Au などの重金属	ジメルカプロール
Co, Cu, Au, Pb などの重金属	ペニシラミン
Fe	メシル酸デフェロキサミン

## 第4章 法令・放射線管理

### 4.1 日常生活と放射線

レントゲンによる X 線 (1895 年) の発見, その翌年のベクレルによるウランからの放射線の発見以来, 放射線の利用が様々に行われてきた。放射線が人類に与えた恩恵は, 医学やエネルギーの面で計り知れないものがあるが, 同時に放射線による被曝が恐ろしい障害を引き起こすこともわかってきた。放射線の被曝による障害は良くないが, 上手に管理すれば有用な道具であるので適正な管理が求められる。

放射線を利用することによる利益と放射線をあびることによる危険とは表裏一体であるので, メリットとデメリットの比較によって利用をきめるべきだというのが現在の放射線に対する考え方である。例えば, 病気の早期発見というようなきわめて大きな利益のためにはある程度の被曝は許されるという考えに立っている。

#### §4.1.1 自然放射線

放射線が人類に意識されるようになる前から, 放射線は人類とともにあった。鉱物や建物から放射される放射線や, 地球に降り注ぐ宇宙線もある。高所では宇宙線の量は多くなり, 富士山頂では地上のほぼ 2 倍ある。そういう放射線を自然放射線という。地球上の生命は, 自然放射線の降り注ぐ環境で生息してきたわけであり, 自然放射線が細胞の突然変異を起こさせ進化に寄与してきたともいえる。

人間が地球で暮らすときに浴びる年間被曝量を表 4.1 にまとめよう。

表 4.1: 自然放射線からの被曝 [mSv]

線源		外部被曝	内部被曝	合計
宇宙線電離成分		0.30	—	0.30
中性子成分		0.055	—	0.005
宇宙線生成核種		—	0.015	0.015
原始放射性 核種	<sup>40</sup> K	0.15	0.18	0.33
	<sup>87</sup> Rb	—	0.006	0.006
	<sup>238</sup> U	0.1	1.24	1.34
	<sup>232</sup> Th	0.16	0.18	0.34
合計		0.8	1.6	2.4

ここで, <sup>238</sup>U の寄与は, ウラン系列の中の <sup>222</sup>Rn からの被曝であり, 年間被曝量の約半分を占めることになる。図 1.9, 図 1.10 参照。

#### §4.1.2 人工放射線

世の中には, 人間が作り出した放射線もある。これを人工放射線という。人工放射線には, 医療・検査用 X 線, 放射性物質を使った医薬品や核実験によるフォールアウト (放射性降下物) から浴びるものなどがある。特徴的な放射線による被曝量を表 4.2 にまとめよう。

表 4.2: さまざまな線量

線量 [mSv]		事例
10 <sup>5</sup>	18000	JCO 事故死亡者 (1999 年 9 月 30 日)
10 <sup>4</sup>	6000	第五福竜丸 (1954 年 3 月)
	4000	被曝した人の半数が一月以内に死亡
10 <sup>3</sup>	2000	吐気, 嘔吐, 脱毛
10 <sup>2</sup>	120	チェルノブイリ原発から半径 30 km 圏内の年間被曝量
10 <sup>1</sup>		
10 <sup>0</sup>	2.4	1 年間あたりの自然放射線
	1	一般公衆の線量限度
10 <sup>-1</sup>	0.6	胃の X 線集団検診
	0.19	ヨーロッパへの飛行機往復
10 <sup>-2</sup>	0.05	胸の X 線集団検診

## 4.2 防護の目的と体系, 法の目的

ICRP では, 被曝の状況を以下の 3 つに分類している.

**計画被曝状況:** 計画的に線源を導入または操業することによる被曝状況. 線量限度として, 一般公衆は 1 mSv/年, 職業人は 100 mSv/5 年かつ 50 mSv/年としている.

**現存被曝状況:** 自然放射線による被曝や過去の行為の結果として存在する被曝状況. 参考レベルとして, 1~20 mSv/年としている.

**緊急時被曝状況:** 不測の事態または悪意の行為から生じる予期せぬ被曝状況. 参考レベルとして, 20~100 mSv/年としている.

### §4.2.1 防護体系

1990 年勧告では, 被曝に伴う人間活動を, 行為と介入に分類している.

**行為:** 被曝を増加させる人間の活動

**介入:** 被曝を減少させる人間の活動

### §4.2.2 防護の目的

ICRP(国際放射線防護委員会) の勧告

- 確定的影響…被曝線量を閾値より低くおさえて発生を完全に防止する.

- 確率的影響…その発生を容認できるレベルまで制限する.

そのために…

- 行為の正当化

放射線の利用が他の手段では望めない利益が得られ、その利益が放射線の被曝による損害を上まわると考えられるときに使用が認められる.

- 防護の最適化

すべての被曝は経済的及び社会的に合理的に達成できる限り低くおさえる. (ALARA=as low as reasonably achievable)

- 個人の線量限度

いかなる場合にも線量の限度を超えてはいけない.

以上の目的を達成するために、以下の図 4.1 に掲げる管理をする必要がある. 以下の節では、個々に見ていこう.

作業環境管理	場所の測定 表面汚染の測定 排気, 排水	<記録> 場所の測定	5年保存
	施設点検	<記帳>	
線源管理	受入, 使用 保管, 廃棄 運搬		
個人管理	教育訓練	<記録> 人の測定	永久保存
	個人の被曝線量 健康診断		

図 4.1: 管理技術

### 4.3 法律の成立と ICRP

1895 年の Röntgen による X 線の発見直後から、放射線はさまざまな用途に利用されてきた。一方で、Röntgen 自身の助手が被曝（ひばく）による火傷を負うという影響があった。さらに、第二次世界大戦に前後して、核兵器開発が活発に行われるようになった。その副産物として、放射線による人体への影響が広く知られるようになった。一定の線量を超えて被曝するとすぐに障害がおこる（確定的影響）場合もあるが、被曝後数年を経てから障害がおこる（確率的影響）こともしだいに知られるようになった。

そこで 1950 年 7 月、国際放射線防護委員会 ICRP(International Commission on Radiological Protection) が誕生した。そこでは、『許容線量』という概念がだされ、そこまでなら被曝してよいという考え方だったという。1977 年勧告では、『線量限度』という概念に変更され、すべての被曝を合理的に達成できる限り低くする。この値は、決して超えることのない被曝線量の天井値とした。

ICRP の勧告に基づき、日本国内の法律を決めている。この法律を RI 規制法という。

### 4.4 原子力基本法

日本の放射線関係の法律の根幹は原子力基本法であり、1955(昭和 30) 年 12 月 19 日制定された。その特徴は第 2 条でうたうように、民主・自主・公開の三原則である。

## (目的)

第1条 この法律は、原子力の研究、開発及び利用を推進することによって、将来におけるエネルギー資源を確保し、学術の進歩と産業の振興とを図り、もって人類社会の福祉と国民生活の水準向上とに寄与することを目的とする。

## (基本方針)

第2条 原子力の研究、開発及び利用は、平和の目的に限り、安全の確保を旨として、民主的な運営の下に、自主的にこれを行うものとし、その成果を公開し、進んで国際協力に資するものとする。

この原子力基本法のもとに、『核燃料物質、核原料物質、原子炉及び放射線の定義に関する政令（原子炉等規制法）』と『放射性同位元素等の規制に関する法律（RI 規制法）』という法律がある。前者は原子力発電所などに適用される法律である。後者が我々に関係する法律であり、次の第20条にその条文がある。

## (放射線による障害の防止措置)

第20条 放射線による障害を防止し、公共の安全を確保するため、放射性物質及び放射線発生装置に係る製造、販売、使用、測定等に対する規制その他保安及び保険上の措置に関しては、別に法律で定める。

## 4.5 RI 規制法

原子力基本法第20条を受けて、1957(昭和32)年6月10日放射線障害防止法が制定された。2019年には核セキュリティ勧告に適合させるために条文を見直し、RI 規制法と名称変更された。基本的なことは法律で定められているが、法律を施行するために、施行令（政令）・施行規則・告示が定められていて、これらを総称して法令という。

## (目的)

第1条 この法律は、原子力基本法の精神にのっとり、放射性同位元素の使用、販売、賃貸、廃棄その他の取扱い、放射線発生装置の使用及び放射性同位元素又は放射線発生装置から発生した放射線によって汚染された物（以下「放射性汚染物」という。）の廃棄その他の取扱いを規制することにより、これらによる放射線障害を防止し、及び特定放射性同位元素を防護して、公共の安全を確保することを目的とする。

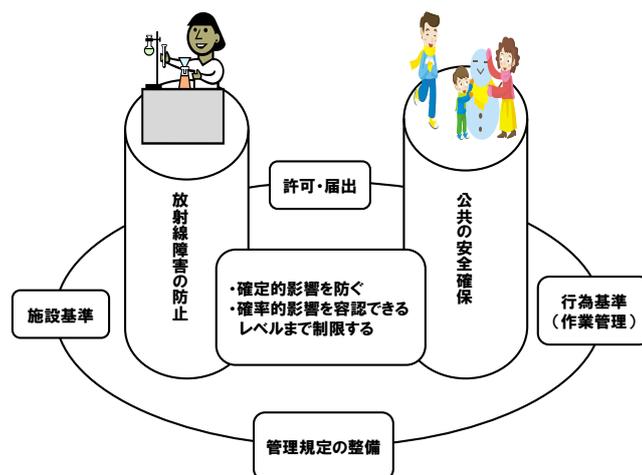


図 4.2: RI 規制法の目的

## 4.6 作業環境管理

非密封放射性同位元素を扱う施設では、管理区域を設けなければならない。管理区域の中には、作業室・汚染検査室・廃棄物保管室などを整備しなければならない。その上で、管理区域内外において放射線の量が法令で定められた量を超えないように作らなければならない。

放射線障害を防止するために、以下のような基準をもうけている。

(注) 3月=13週, 1週=40時間, 1年=50週という換算を考えている。

### §4.6.1 表面密度限度

表面密度限度とは、放射線施設内の人が常時立ち入る場所において、人が触れる物の表面の放射性同位元素の密度限度である。核種によって表のように定められている。

表 4.3: 表面密度限度

区分	密度 [Bq/cm <sup>2</sup> ]
α線を放出する放射性同位元素	4
α線を放出しない放射性同位元素	40

管理区域から持ち出す物に係る表面の放射性同位元素の密度は、表 4.3 の 10 分の 1 とするよう定められている。

### §4.6.2 場所による線量限度

表 4.4: 場所による線量限度

場所	線量限度
人が常時立入る場所 (使用施設)	1 mSv/週 = 20 μSv/h
管理区域境界	1.3 mSv/3月
事業所境界	250 μSv/3月=1mSv/年
病院・診療所の病室	1.3 mSv/3月

事業所境界の線量限度を 4 倍すると 1 mSv/年となり、一般公衆が 1 年間にあびる自然放射線の量と等しくなる。

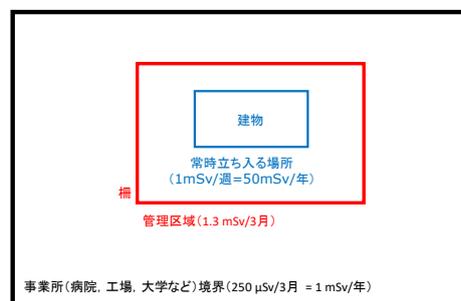


図 4.3: 告示第 10 条しゃへい物に係る線量限度

## 4.7 線源管理

さらに、実験をするにあたっては、放射線を使わないで実験作業をやってみる (Cold run)。作業内容が上の三原則にあてはまっているか考えてみる。その後に、放射性物質を使って本番の実験を行う (Hot run)。

## 4.8 個人管理

密封線源や RI が生成されない放射線発生装置を取り扱うときは、体外照射 (external exposure) のみ考慮すればよい。しかし、非密封放射性同位元素を扱うときは、放射性同位元素が気化するなどして体内に入ってしまうことがある。体内に入った放射性同位元素は、体内で放射線を出し体の内側から臓器を照射する。これを体内照射 (internal exposure) という。体内に RI が入り込む経路には次の 3 つがある。

1. 呼吸器を通しての摂取
2. 口・消化管を通しての摂取
3. 皮膚、とくに傷口を通しての摂取

### §4.8.1 外部被曝を防ぐには

放射線による被曝を防止するためには、次の三原則がいられている。

1. 放射線を適当な物質で遮蔽し、線量を下げる。
2. 放射能物質から距離を置いて操作する。線源が点状の場合、線量は距離の 2 乗に反比例する。
3. 放射能物質を扱う時間を短くする。

### §4.8.2 人の線量限度

実効線量は確率的影響を評価し、等価線量は確定的影響を評価するための量である。

表 4.5: 線量限度

区分	実効線量限度	等価線量限度
下記以外のもの	100 mSv/5 年 50 mSv/年	眼の水晶体 50 mSv/年
女子	5 mSv/3 月	皮膚 500 mSv/年
妊娠中の女子	本人の申し出等により使用者が妊娠の事実を知ったときから出産までの期間につき、内部被曝について 1 mSv	腹部表面について 左記と同じ期間につき 2 mSv
緊急作業時	100 mSv	眼の水晶体 300 mSv 皮膚 1Sv

前の表 4.4 で決められるように、人が常時立入る場所における線量限度は 1 mSv/年であり、その場所で 1 年間作業すると考えて表 4.5 の値 50 mSv/年となる。

## 付録 A 放射線の単位

### A.1 放射線で使われる SI 単位

本書で取り上げられる国際単位は下表のとおりである。

表 A.1: 放射線で使われる SI 単位

名称		SI 記号	
エネルギー		J	
放射能	ベクレル (Becquerel)	Bq	$s^{-1}$
吸収線量	グレイ (Gray)	Gy	J/kg
実効線量	シーベルト (Sievert)	Sv	J/kg
照射線量		C/kg	

### A.2 10 の整数乗倍を表す SI 接頭語

とても大きい数や小さい数を表すのに、数字のゼロをたくさん書くのは、とてもわかり難い。そこで以下のような接頭語というものを決めてゼロをできるだけ少なく書くようにする。

表 A.2: SI 接頭語

名称	記号	大きさ	名称	記号	大きさ
ヨタ (yotta)	Y	$10^{24}$	デシ (deci)	d	$10^{-1}$
ゼタ (zetta)	Z	$10^{21}$	センチ (centi)	c	$10^{-2}$
エクサ (exa)	E	$10^{18}$	ミリ (milli)	m	$10^{-3}$
ペタ (peta)	P	$10^{15}$	マイクロ (micro)	$\mu$	$10^{-6}$
テラ (tera)	T	$10^{12}$	ナノ (nano)	n	$10^{-9}$
ギガ (giga)	G	$10^9$	ピコ (pico)	p	$10^{-12}$
メガ (mega)	M	$10^6$	フェムト (femto)	f	$10^{-15}$
キロ (kilo)	k	$10^3$	アト (atto)	a	$10^{-18}$
ヘクト (hecto)	h	$10^2$	ゼプト (zepto)	z	$10^{-21}$
デカ (deca)	da	$10^1$	ヨクト (yocto)	y	$10^{-24}$

### A.3 電子ボルト

国際単位でのエネルギーの単位はジュール [J] が用いられる。しかし、原子・原子核や放射線の世界では、エネルギーをジュールを単位で表すと非常に小さい数字となる。そこで次に述べる単位が使われる。すなわち、真空中で一個の電子が電位差 1 V で加速されたときに得られるエネルギーを電子ボルト (electron Volt) といい、記号で [eV] と表す。電子の電荷は  $e = 1.60 \times 10^{-19}$  C と与えられているので、

$$1 \text{ eV} = e[\text{C}] \times 1 \text{ V} = 1.60 \times 10^{-19} \text{ J} \quad (\text{A.1})$$

と与えられている。

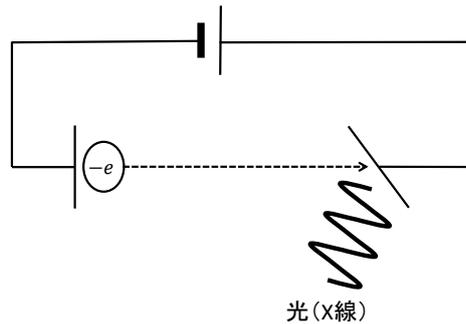


図 A.1: Röntgen の発見 (1895 年)

エネルギー値が大きかったり小さかったりするときは、表 A.2 の SI 接頭語をつけて表すことにする。例えば、

$$1 \text{ keV} = 10^3 \text{ eV}$$

$$1 \text{ MeV} = 10^6 \text{ eV}$$

$$1 \text{ GeV} = 10^9 \text{ eV}$$

といった具合である。それぞれ、ケヴ、メヴ、ジェヴと読んだりする。

## 付録B 周期表

### B.1 周期表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
1	1 H																	2 He	
2	3 Li	4 Be											5 B	6 C	7 N	8 O	9 F	10 Ne	
3	11 Na	12 Mg											13 Al	14 Si	15 P	16 S	17 Cl	18 Ar	
4	19 K	20 Ca	21 Sc	22 Ti	23 V	24 Cr	25 Mn	26 Fe	27 Co	28 Ni	29 Cu	30 Zn	31 Ga	32 Ge	33 As	34 Se	35 Br	36 Kr	
5	37 Rb	38 Sr	39 Y	40 Zr	41 Nb	42 Mo	43 Tc *1	44 Ru	45 Rh	46 Pd	47 Ag	48 Cd	49 In	50 Sn	51 Sb	52 Te	53 I	54 Xe	
6	55 Cs	56 Ba	57-71 ラン	72 Hf	73 Ta	74 W	75 Re	76 Os	77 Ir	78 Pt	79 Au	80 Hg	81 Tl	82 Pb	83 Bi *2	84 Po	85 At	86 Rn	
7	87 Fr	88 Ra	89-103 アク	104 Rf	105 Db	106 Sg	107 Bh	108 Hs	109 Mt	110 Ds	111 Rg	112 Cn	113 Nh	114 Fl	115 Mc	116 Lv	117 Ts	118 Og	
イオン 価数	+1	+2	複雑										+2	+3	-	-3	-2	-1	-
	典型元素 s ブロック	遷移元素 d ブロック										典型元素 p ブロック							

ランタノイド	57 La	58 Ce	59 Pr	60 Nd	61 Pm *1	62 Sm	63 Eu	64 Gd	65 Tb	66 Dy	67 Ho	68 Er	69 Tm	70 Yb	71 Lu
アクチノイド	89 Ac	90 Th	91 Pa	92 U	93 Np *3	94 Pu	95 Am	96 Cm	97 Bk	98 Cf	99 Es	100 Fm	101 Md	102 No	103 Lr
	遷移元素 f ブロック														

\*1 安定同位体なし。

\*2 原子番号 83 以降の原子核には、安定同位体はない。

\*3 原子番号 93 以降の原子核はすべて人工的に作られ、超ウラン元素とよばれる。すなわち、原子番号 92 までは天然に存在する。

## B.2 核外電子配置

周期	殻 元素	K			L			M			N				イオン化 エネルギー [eV]	
		1s	2s	2p	3s	3p	3d	4s	4p	4d	4f					
1	1s	<sub>1</sub> H	1											13.5984		
		<sub>2</sub> He	2											24.5874		
2	2s	<sub>3</sub> Li	2	1										5.3917		
		<sub>4</sub> Be	2	2										9.3227		
	2p	<sub>5</sub> B	2	2	1									8.2980		
		<sub>6</sub> C	2	2	2									11.2603		
		<sub>7</sub> N	2	2	3									14.5341		
		<sub>8</sub> O	2	2	4									13.6181		
		<sub>9</sub> F	2	2	5									17.4228		
		<sub>10</sub> Ne	2	2	6									21.5645		
		3	3s	<sub>11</sub> Na	2	2	6	1								5.1391
				<sub>12</sub> Mg	2	2	6	2								7.6462
3p	<sub>13</sub> Al		2	2	6	2	1							5.9858		
	<sub>14</sub> Si		2	2	6	2	2							8.1517		
	<sub>15</sub> P		2	2	6	2	3							10.4867		
	<sub>16</sub> S		2	2	6	2	4							10.3600		
	<sub>17</sub> Cl		2	2	6	2	5							12.9676		
	<sub>18</sub> Ar		2	2	6	2	6							15.7596		
	4		4s	<sub>19</sub> K	2	2	6	2	6			1				4.3407
				<sub>20</sub> Ca	2	2	6	2	6			2				6.1132
3d		<sub>21</sub> Sc	2	2	6	2	6	1	2					6.5615		
		<sub>22</sub> Ti	2	2	6	2	6	2	2					6.8281		
		<sub>23</sub> V	2	2	6	2	6	3	2					6.7462		
		<sub>24</sub> Cr	2	2	6	2	6	5	1					6.7665		
		<sub>25</sub> Mn	2	2	6	2	6	5	2					7.4340		
		<sub>26</sub> Fe	2	2	6	2	6	6	2					7.9024		
		<sub>27</sub> Co	2	2	6	2	6	7	2					7.8810		
		<sub>28</sub> Ni	2	2	6	2	6	8	2					7.6398		
		<sub>29</sub> Cu	2	2	6	2	6	10	1					7.7264		
		4p	<sub>30</sub> Zn	2	2	6	2	6	10	2					9.3942	
<sub>31</sub> Ga			2	2	6	2	6	10	2	1				5.9993		
<sub>32</sub> Ge			2	2	6	2	6	10	2	2				7.8994		
<sub>33</sub> As			2	2	6	2	6	10	2	3				9.7886		
<sub>34</sub> Se			2	2	6	2	6	10	2	4				9.7524		
<sub>35</sub> Br			2	2	6	2	6	10	2	5				11.8138		
<sub>36</sub> Kr			2	2	6	2	6	10	2	6				13.9996		

周期	殻 元素	N				O				P			イオン化 エネルギー [eV]
		4s	4p	4d	4f	5s	5p	5d	5f	6s	6p	6d	
5	5s	<sup>37</sup> Rb	2	6			1						4.1771
		<sup>38</sup> Sr	2	6			2						5.6949
	4d	<sup>39</sup> Y	2	6	1		2						6.2173
		<sup>40</sup> Zr	2	6	2		2						6.6339
		<sup>41</sup> Nb	2	6	4		1						6.7589
		<sup>42</sup> Mo	2	6	5		1						7.0924
		<sup>43</sup> Tc	2	6	5		2						7.28
		<sup>44</sup> Ru	2	6	7		1						7.3605
		<sup>45</sup> Rh	2	6	8		1						7.4589
		<sup>46</sup> Pd	2	6	10								8.3369
		<sup>47</sup> Ag	2	6	10		1						7.5762
		5p	<sup>48</sup> Cd	2	6	10		2					
	<sup>49</sup> In		2	6	10		2	1					5.7864
	<sup>50</sup> Sn		2	6	10		2	2					7.3439
	<sup>51</sup> Sb		2	6	10		2	3					8.6084
	<sup>52</sup> Te		2	6	10		2	4					9.0096
	<sup>53</sup> I		2	6	10		2	5					10.4513
	<sup>54</sup> Xe		2	6	10		2	6					12.1298
6	6s	<sup>55</sup> Cs	2	6	10		2	6			1		3.8939
		<sup>56</sup> Ba	2	6	10		2	6			2		5.2117
	4f	<sup>57</sup> La	2	6	10		2	6	1		2		5.5769
		<sup>58</sup> Ce	2	6	10	1	2	6	1	2			5.5387
		<sup>59</sup> Pr	2	6	10	3	2	6		2			5.473
		<sup>60</sup> Nd	2	6	10	4	2	6		2			5.5250
		<sup>61</sup> Pm	2	6	10	5	2	6		2			5.582
		<sup>62</sup> Sm	2	6	10	6	2	6		2			5.6437
		<sup>63</sup> Eu	2	6	10	7	2	6		2			5.6704
		<sup>64</sup> Gd	2	6	10	7	2	6	1	2			6.1498
		<sup>65</sup> Tb	2	6	10	9	2	6		2			5.8638
		<sup>66</sup> Dy	2	6	10	10	2	6		2			5.9389
		<sup>67</sup> Ho	2	6	10	11	2	6		2			6.0215
		<sup>68</sup> Er	2	6	10	12	2	6		2			6.1077
		<sup>69</sup> Tm	2	6	10	13	2	6		2			6.1843
		<sup>70</sup> Yb	2	6	10	14	2	6		2			6.2542
		<sup>71</sup> Lu	2	6	10	14	2	6	1	2			5.4259

6	5d	72Hf	2	6	10	14	2	6	2	2					6.8251	
		73Ta	2	6	10	14	2	6	3	2					7.5496	
		74W	2	6	10	14	2	6	4	2					7.8640	
		75re	2	6	10	14	2	6	5	2					7.8335	
		76Os	2	6	10	14	2	6	6	2					8.4382	
		77Ir	2	6	10	14	2	6	7	2					8.9670	
		78Pt	2	6	10	14	2	6	9	1					8.9588	
		79Au	2	6	10	14	2	6	10	1					9.2255	
		6p	80Hg	2	6	10	14	2	6	10	2					10.4375
	81Tl		2	6	10	14	2	6	10	2	1				6.1082	
	82Pb		2	6	10	14	2	6	10	2	2				7.4167	
	83Bi		2	6	10	14	2	6	10	2	3				7.2855	
	84Po		2	6	10	14	2	6	10	2	4				8.414	
	85At		2	6	10	14	2	6	10	2	5				-	
	86Rn	2	6	10	14	2	6	10	2	6					10.7485	
		殻	N				O				P			Q		イオン化
周期		元素	4s	4p	4d	4f	5s	5p	5d	5f	6s	6p	6d	7s	7p	エネルギー [eV]
7	7s	87Fr	2	6	10	14	2	6	10		2	6		1		4.0727
		88Ra	2	6	10	14	2	6	10		2	6		2		5.2784
	5f	89Ac	2	6	10	14	2	6	10		2	6	1	2		5.17
		90Th	2	6	10	14	2	6	10		2	6	2	2		6.3067
		91Pa	2	6	10	14	2	6	10	2	2	6	1	2		5.89
		92U	2	6	10	14	2	6	10	3	2	6	1	2		6.1941
		93Np	2	6	10	14	2	6	10	4	2	6	1	2		6.2657
		94Pu	2	6	10	14	2	6	10	6	2	6		2		6.0260
		95Am	2	6	10	14	2	6	10	7	2	6		2		5.9738
		96Cm	2	6	10	14	2	6	10	7	2	6	1	2		5.9914
		97Bk	2	6	10	14	2	6	10	9	2	6		2		6.1979
		98Cf	2	6	10	14	2	6	10	10	2	6		2		6.2817
		99Es	2	6	10	14	2	6	10	11	2	6		2		6.42
	100Fm	2	6	10	14	2	6	10	12	2	6		2		6.50	
	101Md	2	6	10	14	2	6	10	13	2	6		2		6.58	
102No	2	6	10	14	2	6	10	14	2	6		2		6.65		
103Lr	2	6	10	14	2	6	10	14	2	6		2	1?	4.9?		
6d	104Rf	2	6	10	14	2	6	10	14	2	6	2	2?		6.0?	

## 付録C 同位体

放射線化学の試験に、安定同位体と放射性同位体の組み合わせを問う問題がある。大抵の本には、安定同位体と放射性同位体が別々の所に出ているので、比較するのが大変である。そこで、一つにまとめた表が欲しいと思って作成した。

表中に出てくる記号は以下の通り。

### 1. 核種記号

単	単核種元素	安定同位体が1つしかなく天然にはそれ以外の安定同位体が存在しない元素
天	天然放射性元素	天然に存在する放射性核種
系	壊変系列	壊変系列の最初と最後の核種

### 2. 半減期

半減期に数値がないものは、安定同位体である。

y; 年	d; 日	h; 時	m; 分	s; 秒
------	------	------	------	------

ちなみに、地球の年齢は 46 億年 =  $4.6 \times 10^9$  y

### 3. 集積臓器

PET	PET 製薬剤
標的 RI	ガン治療放射性薬

### 第 1 周期

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
0	Neutron	$^1_0\text{n}$	10.4 m	$\beta^-$			
1	Hydrogen	$^1_1\text{H}$	—				99.9885
	Deuterium	$^2_1\text{D}$	—				0.0115
	Tritium	$^3_1\text{T}$	12.32 y	$\beta^-$	0.0186	全身	
2	Helium	$^3_2\text{He}$	—				0.0002
		$^4_2\text{He}$	—				99.9998

## 第 2 周期

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
3	Lithium	${}^6\text{Li}$	—				
		${}^7\text{Li}$	—				
4	Beryllium	${}^7\text{Be}$	53.29 d	EC			100
		${}^9\text{Be}$ 単	—				
		${}^{10}\text{Be}$	$1.51 \times 10^6$ y	$\beta^-$			
5	Boron	${}^{10}\text{B}$	—				
		${}^{11}\text{B}$	—				
6	Carbon	${}^{11}\text{C}$	20.39 m	$\beta^+$ , EC		PET	98.93 1.07 $1.2 \times 10^{-8}$
		${}^{12}\text{C}$	—				
		${}^{13}\text{C}$	—				
		${}^{14}\text{C}$	5730 y	$\beta^-$	0.156	全身	
7	Nitrogen	${}^{13}\text{N}$	9.965 m	$\beta^+$ , EC		PET	
		${}^{14}\text{N}$	—				
		${}^{15}\text{N}$	—				
8	Oxygen	${}^{15}\text{O}$	2.037 m	$\beta^+$ , EC		PET	
		${}^{16}\text{O}$	—				
		${}^{17}\text{O}$	—				
		${}^{18}\text{O}$	—				
9	Fluorine	${}^{18}\text{F}$	109.8 m	$\beta^+$ , EC		PET-FDG	100
		${}^{19}\text{F}$ 単	—				
10	Neon	${}^{20}\text{Ne}$	—				
		${}^{21}\text{Ne}$	—				
		${}^{22}\text{Ne}$	—				

## 第 3 周期

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
11	Sodium	${}^{22}\text{Na}$	2.609 y	$\beta^+$ , EC			100
		${}^{23}\text{Na}$ 単	—				
		${}^{24}\text{Na}$	14.96 h	$\beta^-$			
12	Magnesium	${}^{24}\text{Mg}$	—				
		${}^{25}\text{Mg}$	—				
		${}^{26}\text{Mg}$	—				
		${}^{27}\text{Mg}$	9.458 m	$\beta^-$			
		${}^{28}\text{Mg}$	20.915 h	$\beta^-$			
13	Aluminium	${}^{26}\text{Al}$	$7.4 \times 10^5$ y	$\beta^+$ , EC			100
		${}^{27}\text{Al}$ 単	—				
		${}^{28}\text{Al}$	2.241 m	$\beta^-$			
14	Silicon	${}^{28}\text{Si}$	—				92
		${}^{29}\text{Si}$	—				5
		${}^{30}\text{Si}$	—				3
		${}^{31}\text{Si}$	2.622 h	$\beta^-$			

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
15	Phosphorus	<sup>30</sup> P	2.498 m	$\beta^+$ , EC	3.210	骨	100
		<sup>31</sup> P 単	—				
		<sup>32</sup> P	14.26 d	$\beta^-$	1.711		
		<sup>33</sup> P	25.34 d	$\beta^-$	0.249		
16	Sulfur	<sup>32</sup> S	—		0.167		
		<sup>33</sup> S	—				
		<sup>34</sup> S	—				
		<sup>35</sup> S	87.51 d	$\beta^-$			
		<sup>36</sup> S	—				
17	Chlorine	<sup>35</sup> Cl	—				
		<sup>36</sup> Cl	$3.01 \times 10^5$ y	$\beta^-$ , EC, $\beta^+$			
		<sup>37</sup> Cl	—				
		<sup>38</sup> Cl	37.24 m	$\beta^-$			
18	Argon	<sup>36</sup> Ar	—				
		<sup>37</sup> Ar	35.04 d	EC			
		<sup>38</sup> Ar	—				
		<sup>40</sup> Ar	—				
		<sup>41</sup> Ar	1.822 h	$\beta^-$			
		<sup>42</sup> Ar	32.9 y	$\beta^-$			

## 第4周期

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
19	Potassium	<sup>39</sup> K	—		1.311		93.2581 0.0117 6.7302
		<sup>40</sup> K 天	$1.227 \times 10^9$ y	$\beta^-$ , EC			
		<sup>41</sup> K	—				
		<sup>42</sup> K	12.36 h	$\beta^-$			
		<sup>43</sup> K	22.3 h	$\beta^-$			
20	Calcium	<sup>40</sup> Ca	—		0.257	骨	
		<sup>42</sup> Ca	—				
		<sup>43</sup> Ca	—				
		<sup>44</sup> Ca	—				
		<sup>45</sup> Ca	162.6 d	$\beta^-$			
		<sup>46</sup> Ca	—				
		<sup>47</sup> Ca	4.536 d	$\beta^-$			
21	Scandium	<sup>44<sup>m</sup></sup> Sc	58.61 h	IT, EC			100
		<sup>44</sup> Sc	3.97 h	$\beta^+$ , EC			
		<sup>45</sup> Sc 単	—				
		<sup>46</sup> Sc	83.79 d	$\beta^-$			
		<sup>47</sup> Sc	3.3492 d	$\beta^-$			
		<sup>48</sup> Sc	43.67 h	$\beta^-$			
		<sup>49</sup> Sc	57.2 m	$\beta^-$			

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
22	Titanium	<sup>44</sup> Ti	60.0 y	EC			
		<sup>45</sup> Ti	184.8 m	$\beta^+$ , EC			
		<sup>46</sup> Ti	—				
		<sup>47</sup> Ti	—				
		<sup>48</sup> Ti	—				
		<sup>49</sup> Ti	—				
		<sup>50</sup> Ti	—				
		<sup>51</sup> Ti	5.76 m	$\beta^-$			
23	Vanadium	<sup>48</sup> V	15.9735 d	EC, $\beta^+$			
		<sup>49</sup> V	330 d	EC			
		<sup>50</sup> V	—				
		<sup>51</sup> V	—				
		<sup>52</sup> V	3.743 m	$\beta^-$			
24	Chromium	<sup>50</sup> Cr	—				
		<sup>51</sup> Cr	27.70 d	EC			
		<sup>52</sup> Cr	—				
		<sup>53</sup> Cr	—				
		<sup>54</sup> Cr	—				
25	Manganese	<sup>52m</sup> Mn	21.1 m	$\beta^+$ , EC, IT			
		<sup>52</sup> Mn	5.591 d	EC, $\beta^+$			
		<sup>53</sup> Mn	$3.7 \times 10^6$ y	EC			
		<sup>54</sup> Mn	312.1 d	EC			
		<sup>55</sup> Mn 単	—				
		<sup>56</sup> Mn	2.579 h	$\beta^-$			
26	Iron	<sup>52</sup> Fe	8.275 h	$\beta^+$ , EC		骨髓	5.845
		<sup>54</sup> Fe	—				
		<sup>55</sup> Fe	2.73 y	EC			
		<sup>56</sup> Fe	—				
		<sup>57</sup> Fe	—				
		<sup>58</sup> Fe	—				
		<sup>59</sup> Fe	44.50 d	$\beta^-$			
27	Cobalt	<sup>55</sup> Co	17.53 h	EC, $\beta^+$	0.122	肝臓	
		<sup>56</sup> Co	77.23 d	EC, $\beta^+$			
		<sup>57</sup> Co	271.7 d	EC			
		<sup>58m</sup> Co	9.10 h	IT			
		<sup>58</sup> Co	70.86 d	EC, $\beta^+$			
		<sup>59</sup> Co 単	—				
		<sup>60m</sup> Co	10.467 m	IT, $\beta^-$			
		<sup>60</sup> Co	5.2714 y	$\beta^-$			
		1.173, 1.333					

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
28	Nickel	<sup>56</sup> Ni	6.075 d	EC			
		<sup>57</sup> Ni	35.60 h	EC, $\beta^+$			
		<sup>58</sup> Ni	—				
		<sup>59</sup> Ni	$7.6 \times 10^4$ y	EC			
		<sup>60</sup> Ni	—				
		<sup>61</sup> Ni	—				
		<sup>62</sup> Ni	—				
		<sup>63</sup> Ni	101.2 y	$\beta^-$			
		<sup>64</sup> Ni	—				
		<sup>65</sup> Ni	2.5175 h	$\beta^-$			
<sup>66</sup> Ni	54.6 h	$\beta^-$					
29	Copper	<sup>61</sup> Cu	3.333 h	$\beta^+$ , EC			
		<sup>62</sup> Cu	9.673 m	$\beta^+$ , EC			
		<sup>63</sup> Cu	—				
		<sup>64</sup> Cu	12.70 h	EC, $\beta^+$ , $\beta^-$		PET	
		<sup>65</sup> Cu	—				
		<sup>66</sup> Cu	5.120 m	$\beta^-$			
		<sup>67</sup> Cu	61.83 h	$\beta^-$			
30	Zinc	<sup>62</sup> Zn	9.186 h	EC, $\beta^+$			
		<sup>63</sup> Zn	38.47 m	$\beta^+$ , EC			
		<sup>64</sup> Zn	—				
		<sup>65</sup> Zn	244.3 d	EC, $\beta^+$			
		<sup>66</sup> Zn	—				
		<sup>67</sup> Zn	—				
		<sup>68</sup> Zn	—				
		<sup>69<sup>m</sup></sup> Zn	13.76 h	IT, $\beta^-$			
		<sup>69</sup> Zn	56.4 m	$\beta^-$			
		<sup>70</sup> Zn	—				
<sup>72</sup> Zn	46.5 h	$\beta^-$					
31	Gallium	<sup>66</sup> Ga	9.49 h	$\beta^+$ , EC			
		<sup>67</sup> Ga	3.261 d	EC			
		<sup>68</sup> Ga	67.71 m	$\beta^+$ , EC			
		<sup>69</sup> Ga	—				
		<sup>70</sup> Ga	21.14 m	$\beta^-$ , EC			
		<sup>71</sup> Ga	—				
		<sup>72</sup> Ga	14.10 h	$\beta^-$			
32	Germanium	<sup>68</sup> Ge	270.8 d	EC			
		<sup>69</sup> Ge	39.05 h	EC			
		<sup>70</sup> Ge	—				
		<sup>71</sup> Ge	11.43 d	EC			
		<sup>72</sup> Ge	—				
		<sup>73</sup> Ge	—				
		<sup>74</sup> Ge	—				
		<sup>75</sup> Ge	82.78 m	$\beta^-$			
		<sup>76</sup> Ge	—				
		<sup>77<sup>m</sup></sup> Ge	53.7 s	$\beta^-$ , IT			
<sup>77</sup> Ge	11.211 h	$\beta^-$					

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
33	Arsenic	<sup>71</sup> As	65.30 h	$\beta^+$ , EC			100
		<sup>72</sup> As	26.0 h	$\beta^+$ , EC			
		<sup>73</sup> As	80.30 d	EC			
		<sup>74</sup> As	17.77 d	EC, $\beta^+$ , $\beta^-$			
		<sup>75</sup> As 単	—				
		<sup>76</sup> As	26.24 h	$\beta^-$			
		<sup>77</sup> As	38.83 h	$\beta^-$			
34	Selenium	<sup>72</sup> Se	8.40 d	EC			
		<sup>74</sup> Se	—				
		<sup>75</sup> Se	119.8 d	EC			
		<sup>76</sup> Se	—				
		<sup>77m</sup> Se	17.36 s	IT			
		<sup>77</sup> Se	—				
		<sup>78</sup> Se	—				
		<sup>79</sup> Se	$3.27 \times 10^5$ y	$\beta^-$			
		<sup>80</sup> Se	—				
		<sup>81m</sup> Se	57.28 m	IT, $\beta^-$			
		<sup>81</sup> Se	18.45 m	$\beta^-$			
<sup>82</sup> Se	—						
35	Bromine	<sup>76</sup> Br	16.2 h	EC, $\beta^+$			
		<sup>77</sup> Br	57.036 h	EC, $\beta^+$			
		<sup>79</sup> Br	—				
		<sup>80m</sup> Br	4.4205 h	IT			
		<sup>80</sup> Br	17.68 m	$\beta^-$ , EC, $\beta^+$			
		<sup>81</sup> Br	—				
		<sup>82</sup> Br	35.30 h	$\beta^-$			
		<sup>83</sup> Br	2.374 h	$\beta^-$			
36	Krypton	<sup>78</sup> Kr	—				
		<sup>79</sup> Kr	35.04 h	EC, $\beta^+$			
		<sup>80</sup> Kr	—				
		<sup>81m</sup> Kr	13.10 s	IT, EC			
		<sup>81</sup> Kr	$2.29 \times 10^5$ y	EC			
		<sup>82</sup> Kr	—				
		<sup>83m</sup> Kr	1.83 h	IT			
		<sup>83</sup> Kr	—				
		<sup>84</sup> Kr	—				
		<sup>85m</sup> Kr	4.480	$\beta^-$ , IT			
		<sup>85</sup> Kr	10.76 y	$\beta^-$			
<sup>86</sup> Kr	—						

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
37	Rubidium	<sup>81m</sup> Rb	30.5 m	IT, EC			
		<sup>81</sup> Rb	4.576 h	EC, $\beta^+$			
		<sup>82</sup> Rb	1.273 m	$\beta^+$ , EC			
		<sup>83</sup> Rb	86.2 d	EC			72.17
		<sup>84</sup> Rb	32.77 d	EC, $\beta^+$ , $\beta^-$			
		<sup>85</sup> Rb	—				
		<sup>86</sup> Rb	18.642 d	$\beta^-$ , EC			
		<sup>87</sup> Rb 天	$4.923 \times 10^{10}$ y	$\beta^-$			27.83
		<sup>88</sup> Rb	17.78 m	$\beta^-$			
38	Strontium	<sup>82</sup> Sr	25.36 d	EC			
		<sup>83</sup> Sr	32.41 h	$\beta^+$ , EC			
		<sup>84</sup> Sr	—				
		<sup>85</sup> Sr	64.84 d	EC			
		<sup>86</sup> Sr	—				
		<sup>87m</sup> Sr	2.815 h	IT, EC			
		<sup>87</sup> Sr	—				
		<sup>88</sup> Sr	—				
		<sup>89</sup> Sr	50.53 d	$\beta^-$			
		<sup>90</sup> Sr	28.74 y	$\beta^-$	0.546	骨	
		<sup>91</sup> Sr	9.65 h	$\beta^-$			
39	Yttrium	<sup>86m</sup> Y	47.4 m	IT, $\beta^+$ , EC			
		<sup>86</sup> Y	14.74 h	EC, $\beta^+$			
		<sup>87</sup> Y	79.8 h	EC, $\beta^+$			
		<sup>88</sup> Y	106.65 h	EC, $\beta^+$			
		<sup>89</sup> Y 単	—				100
		<sup>90</sup> Y	64.00 h	$\beta^-$	2.280		
		<sup>91m</sup> Y	49.71 m	IT			
		<sup>91</sup> Y	58.51 d	$\beta^-$			
40	Zirconium	<sup>88</sup> Zr	83.4 d	EC			
		<sup>89m</sup> Zr	4.161 m	IT, EC, $\beta^+$			
		<sup>89</sup> Zr	78.41 h	$\beta^+$ , EC			
		<sup>90</sup> Zr	—				
		<sup>91</sup> Zr	—				
		<sup>92</sup> Zr	—				
		<sup>93</sup> Zr	$1.61 \times 10^6$ y	$\beta^-$			
		<sup>94</sup> Zr	—				
		<sup>95</sup> Zr	64.02 d	$\beta^-$			
		<sup>96</sup> Zr	—				
<sup>97</sup> Zr	16.749 h	$\beta^-$					
41	Niobium	<sup>90</sup> Nb	14.60 h	$\beta^+$ , EC			
		<sup>92m</sup> Nb	10.15 d	EC, $\beta^+$			
		<sup>93m</sup> Nb	16.13 y	IT			
		<sup>93</sup> Nb 単	—				100
		<sup>94</sup> Nb	$2.03 \times 10^4$ y	$\beta^-$			
		<sup>95m</sup> Nb	3.61 d	IT, $\beta^-$			
		<sup>95</sup> Nb	34.98 d	$\beta^-$			
		<sup>97m</sup> Nb	58.7 s	IT			
		<sup>97</sup> Nb	72.1 m	$\beta^-$			

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
42	Molybdenum	<sup>92</sup> Mo	—				
		<sup>93</sup> Mo	4.0 × 10 <sup>3</sup> y	EC			
		<sup>94</sup> Mo	—				
		<sup>95</sup> Mo	—				
		<sup>96</sup> Mo	—				
		<sup>97</sup> Mo	—				
		<sup>98</sup> Mo	—				
		<sup>99</sup> Mo	65. 94 h	β <sup>-</sup>			
		<sup>100</sup> Mo	—				
43	Technetium * <sup>1</sup>	<sup>92</sup> Tc	4.25 m	β <sup>+</sup> , EC			
		<sup>95m</sup> Tc	61 d	EC, IT, β <sup>+</sup>			
		<sup>95</sup> Tc	20 h	EC			
		<sup>99m</sup> Tc	6.01 h	IT, β <sup>-</sup>			
		<sup>99</sup> Tc	2.111 × 10 <sup>5</sup> y	β <sup>-</sup>			
44	Ruthenium	<sup>96</sup> Ru	—				
		<sup>98</sup> Ru	—				
		<sup>99</sup> Ru	—				
		<sup>100</sup> Ru	—				
		<sup>101</sup> Ru	—				
		<sup>102</sup> Ru	—				
		<sup>103</sup> Ru	39.26 d	β <sup>-</sup>			骨髄
		<sup>104</sup> Ru	—				
		<sup>106</sup> Ru	373.6 d	β <sup>-</sup>			
45	Rhodium	<sup>99</sup> Rh	16.1 d	EC, β <sup>+</sup>			
		<sup>103m</sup> Rh	56.114 m	IT			
		<sup>103</sup> Rh 単	—				
		<sup>105m</sup> Rh	42.9 s	IT			
		<sup>105</sup> Rh	35.36 h	β <sup>-</sup>			
		<sup>106</sup> Rh	30.07 s	β <sup>-</sup>			
46	Palladium	<sup>102</sup> Pd	—				
		<sup>103</sup> Pd	16.991 d	EC			
		<sup>104</sup> Pd	—				
		<sup>105</sup> Pd	—				
		<sup>106</sup> Pd	—				
		<sup>108</sup> Pd	—				
		<sup>109</sup> Pd	13.59 h	β <sup>-</sup>			
		<sup>110</sup> Pd	—				
		<sup>112</sup> Pd	21.04 h	β <sup>-</sup>			

\*<sup>1</sup>安定同位体なし.

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
47	Silver	<sup>105</sup> Ag	41.29 d	EC			
		<sup>107m</sup> Ag	44.3 s	IT			
		<sup>107</sup> Ag	—				
		<sup>108</sup> Ag	2.382 m	$\beta^-$ , EC, $\beta^+$			
		<sup>109m</sup> Ag	39.79 s	IT			
		<sup>109</sup> Ag	—				
		<sup>110m</sup> Ag	249.83 d	$\beta^-$ , IT			
		<sup>110</sup> Ag	24.56 s	$\beta^-$ , EC			
		<sup>111m</sup> Ag	64.8 s	IT, $\beta^-$			
		<sup>111</sup> Ag	7.45 d	$\beta^-$			
		<sup>112</sup> Ag	3.130 h	$\beta^-$			
48	Cadmium	<sup>106</sup> Cd	—				
		<sup>107</sup> Cd	6.50 h	EC, $\beta^+$			
		<sup>108</sup> Cd	—				
		<sup>109</sup> Cd	461.4 h	EC			
		<sup>110</sup> Cd	—				
		<sup>111m</sup> Cd	48.50 m	IT			
		<sup>111</sup> Cd	—				
		<sup>112</sup> Cd	—				
		<sup>113</sup> Cd 天	$7.7 \times 10^{15}$ y				12.22
		<sup>114</sup> Cd	—				
		<sup>115m</sup> Cd	44.56 h	$\beta^-$			
		<sup>115</sup> Cd	53.46 h	$\beta^-$			
		<sup>116</sup> Cd	—				
		<sup>117m</sup> Cd	3.36 h	$\beta^-$			
		<sup>117</sup> Cd	2.49 h	$\beta^-$			
49	Indium	<sup>109</sup> In	4.2 h	EC, $\beta^+$			
		<sup>110</sup> In	4.9 h	EC, $\beta^+$			
		<sup>111</sup> In	2.8047 d	EC			
		<sup>112</sup> In	14.97 m	EC, $\beta^-$ , $\beta^+$			
		<sup>113m</sup> In	1.6579 h	IT			
		<sup>113</sup> In	—				4.281
		<sup>114m</sup> In	49.51 d	IT, EC, $\beta^+$			
		<sup>114</sup> In	71.9 s	$\beta^-$ , EC, $\beta^+$			
		<sup>115m</sup> In	4.486 h	IT, $\beta^-$			
		<sup>115</sup> In 天	$4.41 \times 10^{14}$ y	$\beta^-$			95.719
		<sup>116m</sup> In	54.29 m	$\beta^-$ , EC			
		<sup>117m</sup> In	116.2 m	$\beta^-$ , IT			
		<sup>117</sup> In	43.2 m	$\beta^-$			
		<sup>119m</sup> In	18.0 m	$\beta^-$ , IT			
		<sup>119</sup> In	2.4 m	$\beta^-$			

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
50	Tin	$^{112}\text{Sn}$	—				
		$^{113}\text{Sn}$	115.09 d	EC, $\beta^+$			
		$^{114}\text{Sn}$	—				
		$^{115}\text{Sn}$	—				
		$^{116}\text{Sn}$	—				
		$^{117m}\text{Sn}$	14.00 d	IT			
		$^{117}\text{Sn}$	—				
		$^{118}\text{Sn}$	—				
		$^{119m}\text{Sn}$	293.1 d	IT			
		$^{119}\text{Sn}$	—				
		$^{120}\text{Sn}$	—				
		$^{121m}\text{Sn}$	43.9 y	IT, $\beta^-$			
		$^{121}\text{Sn}$	27.03 h	$\beta^-$			
		$^{122}\text{Sn}$	—				
		$^{123m}\text{Sn}$	40.06 m	$\beta^-$			
		$^{123}\text{Sn}$	129.2 d	$\beta^-$			
$^{124}\text{Sn}$	—						
$^{125}\text{Sn}$	9.64 d	$\beta^-$					
51	Antimony	$^{121}\text{Sb}$	—				
		$^{122}\text{Sb}$	2.7238 d	$\beta^-$ , EC, $\beta^+$			
		$^{123}\text{Sb}$	—				
		$^{124}\text{Sb}$	60.20 d	$\beta^-$			
		$^{125}\text{Sb}$	2.75856 y	$\beta^-$			
		$^{127}\text{Sb}$	3.85 d	$\beta^-$			
52	Tellurium	$^{120}\text{Te}$	—				
		$^{121m}\text{Te}$	164.2 d	IT, EC			
		$^{121}\text{Te}$	19.17 d	EC			
		$^{122}\text{Te}$	—				
		$^{123m}\text{Te}$	119.25 d				
		$^{123}\text{Te}$ 天	$9.2 \times 10^{16}$ y	EC			0.89
		$^{124}\text{Te}$	—				
		$^{125m}\text{Te}$	57.40 d	IT			
		$^{125}\text{Te}$	—				
		$^{126}\text{Te}$	—				
		$^{127m}\text{Te}$	106.1 d	IT, $\beta^-$			
		$^{127}\text{Te}$	9.35 h	$\beta^-$			
		$^{128}\text{Te}$	—				
		$^{129m}\text{Te}$	33.6 d	IT, $\beta^-$			
		$^{129}\text{Te}$	69.6 m	$\beta^-$			
		$^{130}\text{Te}$	—				
$^{132}\text{Te}$	3.204 d	$\beta^-$					

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
53	Iodine	<sup>121</sup> I	2.12 h	EC, $\beta^+$	0.0355, 0.0275	甲状腺	100
		<sup>123</sup> I	13.27 h	EC			
		<sup>124</sup> I	4.1760 h	EC, $\beta^+$			
		<sup>125</sup> I	59.40 d	EC			
		<sup>126</sup> I	12.93 d	EC, $\beta^+$ , $\beta^-$			
		<sup>127</sup> I 単	—				
		<sup>128</sup> I	24.99 m	$\beta^-$ , EC, $\beta^+$			
		<sup>129</sup> I	$1.57 \times 10^7$ y	$\beta^-$	0.606		
		<sup>130</sup> I	12.36 h	$\beta^-$			
		<sup>131</sup> I	8.021 d	$\beta^-$			
		<sup>132</sup> I	2.295 h	$\beta^-$			
		<sup>133</sup> I	20.8 h	$\beta^-$			
		<sup>134</sup> I	52.5 m	$\beta^-$			
		<sup>135</sup> I	6.58 h	$\beta^-$			
54	Xenon	<sup>124</sup> Xe	—				
		<sup>126</sup> Xe	—				
		<sup>128</sup> Xe	—				
		<sup>129</sup> Xe	—				
		<sup>130</sup> Xe	—				
		<sup>131</sup> Xe	—				
		<sup>131m</sup> Xe	11.84 d	IT			
		<sup>132</sup> Xe	—				
		<sup>133m</sup> Xe	2.19 d	IT			
		<sup>133</sup> Xe	5.243 d	$\beta^-$			
		<sup>134</sup> Xe	—				
		<sup>135m</sup> Xe	15.29 m	IT, $\beta^-$			
		<sup>135</sup> Xe	9.14 h	$\beta^-$			
		<sup>136</sup> Xe	—				

## 第6周期

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %		
55	Caesium	<sup>129</sup> Cs	32.06 h	EC, $\beta^+$			100		
		<sup>130</sup> Cs	29.21 m	EC, $\beta^+$ , $\beta^-$					
		<sup>131</sup> Cs	9.689 d	EC					
		<sup>132</sup> Cs	6.479 d	EC, $\beta^+$ , $\beta^-$					
		<sup>133</sup> Cs 単	—						
		<sup>134m</sup> Cs	2.903 h	IT					
		<sup>134</sup> Cs	2.065 y	$\beta^-$ , EC				0.658	全身
		<sup>135</sup> Cs	$2.3 \times 10^6$ y	$\beta^-$				0.269	
		<sup>137</sup> Cs	30.04 y	$\beta^-$				0.662	全身

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
56	Barium	$^{130}\text{Ba}$	—				
		$^{131}\text{Ba}$	11.50 d	EC			
		$^{132}\text{Ba}$	—				
		$^{133m}\text{Ba}$	38.9 h	IT, EC			
		$^{133}\text{Ba}$	10.51 y	EC			
		$^{134}\text{Ba}$	—				
		$^{135}\text{Ba}$	—				
		$^{136}\text{Ba}$	—				
		$^{137m}\text{Ba}$	2.552 m	IT	0.662		
		$^{137}\text{Ba}$	—				
		$^{138}\text{Ba}$	—				
		$^{139}\text{Ba}$	82.93 m	$\beta^-$			
		$^{140}\text{Ba}$	12.75 d	$\beta^-$			
57	Lanthanum <sup>*2</sup>	$^{138}\text{La}$ 天	$1.05 \times 10^{11}$ y	EC, $\beta^-$			0.090
		$^{139}\text{La}$	—				99.910
		$^{140}\text{La}$	1.678 d	$\beta^-$			
58	Cerium	$^{136}\text{Ce}$	—				
		$^{138}\text{Ce}$	—				
		$^{139}\text{Ce}$	137.641 d	EC			
		$^{140}\text{Ce}$	—				
		$^{141}\text{Ce}$	32.508 d	$\beta^-$			
		$^{142}\text{Ce}$	—				
		$^{143}\text{Ce}$	33.039 h	$\beta^-$			
$^{144}\text{Ce}$	284.9 d	$\beta^-$					
59	Praseodymium	$^{141}\text{Pr}$ 単	—				100
		$^{142}\text{Pr}$	19.12 h	$\beta^-$ , EC			
		$^{143}\text{Pr}$	13.57 d	$\beta^-$			
		$^{144m}\text{Pr}$	7.2 m	IT, $\beta^-$			
		$^{144}\text{Pr}$	17.28 m	$\beta^-$			
60	Neodymium	$^{142}\text{Nd}$	—				
		$^{143}\text{Nd}$	—				
		$^{144}\text{Nd}$ 天	$2.29 \times 10^{15}$ y	$\alpha$			23.8
		$^{145}\text{Nd}$	—				
		$^{146}\text{Nd}$	—				
		$^{147}\text{Nd}$	10.98 d	$\beta^-$			
		$^{148}\text{Nd}$	—				
		$^{149}\text{Nd}$	1.728 h	$\beta^-$			
		$^{150}\text{Nd}$	—				
		$^{151}\text{Nd}$	12.44 m	$\beta^-$			
61	Promethium <sup>*3</sup>	$^{147}\text{Pm}$	2.623 y	$\beta^-$			
		$^{149}\text{Pm}$	53.08 h	$\beta^-$			
		$^{151}\text{Pm}$	28.40 h	$\beta^-$			

\*2原子番号 57～71 まではランタノイドである。

\*3安定同位体なし。

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
62	Samarium	$^{144}\text{Sm}$	—				14.99 11.24
		$^{147}\text{Sm}$ 天	$1.06 \times 10^{11}$ y	$\alpha$			
		$^{148}\text{Sm}$ 天	$7 \times 10^{15}$ y	$\alpha$			
		$^{149}\text{Sm}$	—				
		$^{150}\text{Sm}$	—				
		$^{151}\text{Sm}$	90 y	$\beta^-$			
		$^{152}\text{Sm}$	—				
		$^{153}\text{Sm}$	46.284 h	$\beta^-$			
		$^{154}\text{Sm}$	—				
		$^{155}\text{Sm}$	22.3 m	$\beta^-$			
63	Europium	$^{151}\text{Eu}$	—				
		$^{152m}\text{Eu}$	9.3116 h	$\beta^-$ , EC, $\beta^-$			
		$^{152}\text{Eu}$	13.537 y	EC, $\beta^+$ , $\beta^-$			
		$^{153}\text{Eu}$	—				
		$^{154}\text{Eu}$	8.593 y	$\beta^-$ , EC, $\beta^+$			
		$^{155}\text{Eu}$	4.7611 y	$\beta^-$			
		$^{156}\text{Eu}$	15.19 d	$\beta^-$			
64	Gadolinium	$^{152}\text{Gd}$ 天	$1.08 \times 10^{14}$ y	$\alpha$			0.20
		$^{153}\text{Gd}$	240.4 d	EC			
		$^{154}\text{Gd}$	—				
		$^{155}\text{Gd}$	—				
		$^{156}\text{Gd}$	—				
		$^{157}\text{Gd}$	—				
		$^{158}\text{Gd}$	—				
		$^{159}\text{Gd}$	18.479 h	$\beta^-$			
		$^{160}\text{Gd}$	—				
65	Terbium	$^{157}\text{Tb}$	71 y	EC			100
		$^{159}\text{Tb}$ 単	—				
		$^{160}\text{Tb}$	72.3 d	$\beta^-$			
		$^{161}\text{Tb}$	6.89 d	$\beta^-$			
66	Dysprosium	$^{156}\text{Dy}$	—				
		$^{157}\text{Dy}$	8.14 h	EC, $\beta^+$			
		$^{158}\text{Dy}$	—				
		$^{160}\text{Dy}$	—				
		$^{161}\text{Dy}$	—				
		$^{162}\text{Dy}$	—				
		$^{163}\text{Dy}$	—				
		$^{164}\text{Dy}$	—				
		$^{165}\text{Dy}$	2.334 h	$\beta^-$			
		$^{166}\text{Dy}$	81.6 h	$\beta^-$			
67	Holmium	$^{165}\text{Ho}$ 単	—				100
		$^{166m}\text{Ho}$	$1.20 \times 10^3$ y	$\beta^-$			
		$^{166}\text{Ho}$	26.83 h	$\beta^-$			

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
68	Erbium	$^{162}\text{Er}$	—				
		$^{164}\text{Er}$	—				
		$^{166}\text{Er}$	—				
		$^{167}\text{Er}$	—				
		$^{168}\text{Er}$	—				
		$^{169}\text{Er}$	9.40 d	$\beta^-$			
		$^{170}\text{Er}$	—				
		$^{171}\text{Er}$	7.516 h	$\beta^-$			
69	Thulium	$^{169}\text{Tm}$ 単	—				100
		$^{170}\text{Tm}$	128.6 d	$\beta^-$ , EC			
		$^{171}\text{Tm}$	1.92 y	$\beta^-$			
70	Ytterbium	$^{168}\text{Yb}$	—				
		$^{169}\text{Yb}$	32.026 d	EC			
		$^{170}\text{Yb}$	—				
		$^{171}\text{Yb}$	—				
		$^{172}\text{Yb}$	—				
		$^{173}\text{Yb}$	—				
		$^{174}\text{Yb}$	—				
		$^{175}\text{Yb}$	4.185 d	$\beta^-$			
		$^{176}\text{Yb}$	—				
		$^{177}\text{Yb}$	1.911 h	$\beta^-$			
71	Lutetium	$^{175}\text{Lu}$	—				97.401
		$^{176m}\text{Lu}$	3.664 h	$\beta^-$ , EC			2.599
		$^{176}\text{Lu}$ 天	$3.76 \times 10^{10}$ y	$\beta^-$			
		$^{177}\text{Lu}$	6.647 d	$\beta^-$			
72	Hafnium	$^{174}\text{Hf}$ 天	$2.0 \times 10^{15}$ y	$\alpha$			0.16
		$^{175}\text{Hf}$	70 d	EC			
		$^{176}\text{Hf}$	—				
		$^{177}\text{Hf}$	—				
		$^{178}\text{Hf}$	—				
		$^{179}\text{Hf}$	—				
		$^{180m}\text{Hf}$	5.5 h	IT, $\beta^-$			
		$^{180}\text{Hf}$	—				
		$^{181}\text{Hf}$	42.39 d	$\beta^-$			
73	Tantalum	$^{180}\text{Ta}$	8.152 h	EC, $\beta^-$			
		$^{181}\text{Ta}$	—				
		$^{182}\text{Ta}$	114.74 d	$\beta^-$			
74	Tungsten	$^{180}\text{W}$	—				
		$^{181}\text{W}$	121.2 d	EC			
		$^{182}\text{W}$	—				
		$^{183}\text{W}$	—				
		$^{184}\text{W}$	—				
		$^{185}\text{W}$	75.1 d	$\beta^-$			
		$^{186}\text{W}$	—				
		$^{187}\text{W}$	24.000 h	$\beta^-$			
		$^{188}\text{W}$	69.78 d	$\beta^-$			

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
75	Rhenium	<sup>183</sup> Re	70.0 d	EC			37.40
		<sup>185</sup> Re	—				
		<sup>186</sup> Re	3.7183 d	$\beta^-$ , EC			62.60
		<sup>187</sup> Re 天	$4.33 \times 10^{10}$ y	$\beta^-$			
		<sup>188</sup> Re	17.0040 h	$\beta^-$			
76	Osmium	<sup>184</sup> Os	—				1.59
		<sup>185</sup> Os	93.6 d	EC			
		<sup>186</sup> Os 天	$2.0 \times 10^{15}$ y	$\alpha$			
		<sup>187</sup> Os	—				
		<sup>188</sup> Os	—				
		<sup>189</sup> Os	—				
		<sup>190</sup> Os	—				
		<sup>191m</sup> Os	13.10 h	IT			
		<sup>191</sup> Os	15.4 d	$\beta^-$			
		<sup>192</sup> Os	—				
		<sup>193</sup> Os	29.830 h	$\beta^-$			
77	Iridium	<sup>191m</sup> Ir	4.899 s	IT			
		<sup>191</sup> Ir	—				
		<sup>192</sup> Ir	73.83 d	$\beta^-$ , EC			
		<sup>193m</sup> Ir	10.53 d	IT			
		<sup>193</sup> Ir	—				
		<sup>194</sup> Ir	19.28 h	$\beta^-$			
78	Platinum	<sup>190</sup> Pt 天	$6.5 \times 10^{11}$ y	$\alpha$			0.014
		<sup>192</sup> Pt	—				
		<sup>193m</sup> Pt	4.33 d	IT			
		<sup>193</sup> Pt	50 y	EC			
		<sup>194</sup> Pt	—				
		<sup>195</sup> Pt	—				
		<sup>196</sup> Pt	—				
		<sup>197</sup> Pt	19.8915 h	$\beta^-$			
		<sup>198</sup> Pt	—				
		<sup>199</sup> Pt	30.08 m	$\beta^-$			
79	Gold	<sup>195</sup> Au	186.10 d	EC			100
		<sup>197m</sup> Au	7.73 s	IT			
		<sup>197</sup> Au 単	—				
		<sup>198</sup> Au	2.695 d	$\beta^-$	0.961		
		<sup>199</sup> Au	3.139 d	$\beta^-$			
80	Mercury	<sup>196</sup> Hg	—				
		<sup>197m</sup> Hg	23.8 h	IT, EC			
		<sup>197</sup> Hg	64.94 h	EC			
		<sup>198</sup> Hg	—				
		<sup>199</sup> Hg	—				
		<sup>200</sup> Hg	—				
		<sup>201</sup> Hg	—				
		<sup>202</sup> Hg	—				
		<sup>203</sup> Hg	46.61 d	$\beta^-$			
		<sup>204</sup> Hg	—				
		<sup>206</sup> Hg	8.32 m	$\beta^-$			

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
81	Thallium	<sup>200</sup> Tl	26.1 h	EC, $\beta^+$	2.615		29.52
		<sup>201</sup> Tl	3.0421 d	EC			
		<sup>202</sup> Tl	12.31 d	EC			
		<sup>203</sup> Tl	—				
		<sup>204</sup> Tl	3.783 y	$\beta^-$ , EC, $\beta^+$			
		<sup>205</sup> Tl 系 1	—				
		<sup>206</sup> Tl	4.202 m	$\beta^-$			
		<sup>207</sup> Tl	4.77 m	$\beta^-$			
		<sup>208</sup> Tl	3.053 m	$\beta^-$			
		<sup>209</sup> Tl	2.162 m	$\beta^-$			
<sup>210</sup> Tl	1.30 m	$\beta^-$					
82	Lead	<sup>200</sup> Pb	21.5 h	EC			1.4
		<sup>201</sup> Pb	9.33 h	EC, $\beta^+$			
		<sup>202<sup>m</sup></sup> Pb	3.53 h	IT, EC			
		<sup>202</sup> Pb	$5.25 \times 10^4$ y	EC, $\alpha$			
		<sup>203</sup> Pb	51.873 h	EC			
		<sup>204</sup> Pb	—				
		<sup>206</sup> Pb 系 2	—				
		<sup>207<sup>m</sup></sup> Pb	0.806 s	IT			
		<sup>207</sup> Pb 系 3	—				
		<sup>208</sup> Pb 系 0	—				
		<sup>209</sup> Pb	3.234 h	$\beta^-$			
		<sup>210</sup> Pb	22.20 y	$\beta^-$ , $\alpha$			
		<sup>211</sup> Pb	36.1 m	$\beta^-$			
		<sup>212</sup> Pb	10.64 h	$\beta^-$			
<sup>214</sup> Pb	27.06 m	$\beta^-$					
83	Bismuth <sup>*4</sup>	<sup>206</sup> Bi	6.243 d	EC, $\beta^+$	0.609		100
		<sup>207</sup> Bi	31.55 y	EC, $\beta^+$			
		<sup>208</sup> Bi	$3.68 \times 10^5$ y	EC			
		<sup>209</sup> Bi	$2.01 \times 10^{19}$ y	$\alpha$			
		<sup>210</sup> Bi	5.012 d	$\beta^-$ , $\alpha$			
		<sup>211</sup> Bi	2.14 m	$\alpha$ , $\beta^-$			
		<sup>212</sup> Bi	60.55 m	$\beta^-$ , $\alpha$			
		<sup>213</sup> Bi	45.59 m	$\beta^-$ , $\alpha$			
		<sup>214</sup> Bi	19.9 m	$\beta^-$ , $\alpha$			
		<sup>215</sup> Bi	7.6 m	$\beta^-$			
84	Polonium	<sup>208</sup> Po	2.898 y	$\alpha$ , EC, $\beta^+$			
		<sup>210</sup> Po	138.376 d	$\alpha$			
		<sup>211</sup> Po	0.516 s	$\alpha$			
		<sup>213</sup> Po	$3.72 \times 10^{-6}$ s	$\alpha$			
		<sup>214</sup> Po	$1.643 \times 10^{-4}$ s	$\alpha$			
		<sup>215</sup> Po	$1.781 \times 10^{-3}$ s	$\alpha$			
		<sup>216</sup> Po	0.145 s	$\alpha$			
		<sup>218</sup> Po	3.098 m	EC, $\alpha$			
85	Astatine	<sup>211</sup> At	7.214 h	EC, $\alpha$		標的 RI	

\*4原子番号 83 以上の原子核には、安定な原子核は存在しない。つまり <sup>83</sup>Bi 以降の原子核は、すべて放射性である。

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
86	Radon	$^{220}\text{Rn}$	55.6 s	$\alpha$			
		$^{222}\text{Rn}$	3.824 d	$\alpha$		肺	

壊変系列			$\alpha$ 壊変	$\beta$ 壊変
トリウム系列	4n	$^{232}\text{Th} \rightarrow ^{208}\text{Pb}$	6	4
ネプツニウム系列	4n+1	$^{237}\text{Np} \rightarrow ^{205}\text{Tl}$	8	4
ウラン系列	4n+2	$^{238}\text{U} \rightarrow ^{206}\text{Pb}$	8	6
アクチニウム系列	4n+3	$^{235}\text{U} \rightarrow ^{207}\text{Pb}$	7	4

## 第7周期

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
87	Francium	$^{221}\text{Fr}$	4.9 m	$\alpha$			
		$^{223}\text{Fr}$	22.00 m	$\beta^-$ , $\alpha$			
88	Radium	$^{223}\text{Ra}$	11.43 d	$\alpha$		標的 RI	
		$^{224}\text{Ra}$	3.66 d	$\alpha$			
		$^{225}\text{Ra}$	14.9 d	$\beta^-$			
		$^{226}\text{Ra}$	1600 y	$\alpha$			骨
		$^{228}\text{Ra}$	5.75 y	$\beta^-$			
89	Actinium <sup>*5</sup>	$^{225}\text{Ac}$	9.9203 d	$\alpha$			
		$^{227}\text{Ac}$	21.772 y	$\beta^-$ , $\alpha$			
		$^{228}\text{Ac}$	6.15 h	$\beta^-$			
90	Thorium	$^{227}\text{Th}$	18.697 d	$\alpha$			
		$^{228}\text{Th}$	1.9116 y	$\alpha$			
		$^{229}\text{Th}$	$7.88 \times 10^3$ y	$\alpha$			
		$^{230}\text{Th}$	$7.54 \times 10^4$ y	$\alpha$			0.02
		$^{231}\text{Th}$	25.52 h	$\beta^-$			
		$^{232}\text{Th}$ 系 0	$1.40 \times 10^{10}$ y	$\alpha$			99.98
		$^{233}\text{Th}$	21.83 m	$\beta^-$			
		$^{234}\text{Th}$	24.10 d	$\beta^-$			
91	Protactinium	$^{231}\text{Pa}$	$3.276 \times 10^4$ y	$\alpha$			100
		$^{233}\text{Pa}$	26.975 d	$\beta^-$			
		$^{234m}\text{Pa}$	1.159 m	$\beta^-$ , IT			
		$^{234}\text{Pa}$	6.70 h	$\beta^-$			
92	Uranium	$^{232}\text{U}$	68.9 y	$\alpha$			
		$^{233}\text{U}$	$1.592 \times 10^5$ y	$\alpha$ , SF			
		$^{234}\text{U}$	$2.455 \times 10^5$ y	$\alpha$ , SF			0.0054
		$^{235m}\text{U}$	26 m	IT			
		$^{235}\text{U}$ 系 3	$7.04 \times 10^8$ y	$\alpha$ , SF			0.7204
		$^{236}\text{U}$	$2.342 \times 10^7$ y	$\alpha$ , SF			
		$^{237}\text{U}$	6.752 d	$\beta^-$			
		$^{238}\text{U}$ 系 2	$4.468 \times 10^9$ y	$\alpha$ , SF			99.2742
$^{239}\text{U}$	23.45 m	$\beta^-$					

\*5原子番号 89~103 はアクチニウムである。

原子番号	名前	核種記号	半減期	壊変形式	エネルギー MeV	集積臓器	存在度 %
93	Neptunium <sup>*6</sup>	<sup>237</sup> Np 系 1	2.144 × 10 <sup>6</sup> y	α, SF			
		<sup>238</sup> Np	2.099 d	β <sup>-</sup>			
		<sup>239</sup> Np	2.356 d	β <sup>-</sup>			
94	Plutonium	<sup>238</sup> Pu	87.7 y	α, SF		肺	
		<sup>239</sup> Pu	2.411 × 10 <sup>4</sup> y	α, SF			
		<sup>240</sup> Pu	6.564 × 10 <sup>3</sup> y	α, SF			
		<sup>241</sup> Pu	14.35 y	β <sup>-</sup> , α			
		<sup>242</sup> Pu	3.75 × 10 <sup>5</sup> y	α, SF			
95	Americium	<sup>241</sup> Am	432.2 y	α, SF	5.486	骨	
		<sup>242</sup> Am	16.02 h	β <sup>-</sup> , EC			
		<sup>243</sup> Am	7.364 × 10 <sup>3</sup> y	α			
96	Curium	<sup>242</sup> Cm	162.8 d	α, SF			
		<sup>244</sup> Cm	18.10 y	α			
		<sup>246</sup> Cm	1.344 × 10 <sup>7</sup> y	SF			
		<sup>248</sup> Cm	4.706 × 10 <sup>3</sup> y	α, SF			
97	Berkelium	<sup>247</sup> Bk	1.38 × 10 <sup>3</sup> y	α			
98	Californium	<sup>252</sup> Cf	2.730 y	α			
			85.5 y	SF			
99	Einsteinium	<sup>254</sup> Es					
100	Fermium	<sup>253</sup> Fm					
101	Mendelevium	<sup>255</sup> Md					
102	Nobelium	<sup>255</sup> No					
103	Lawrencium	<sup>257</sup> Lr					
104	Rutherfordium	<sup>261</sup> Rf					
105	Dubnium	Db					
106	Seaborgium	Sg					
107	Bohrium	Bh					
108	Hassium	Hs					
109	Meitnerium	Mt					
110	Darmstadtium	Ds					
111	Rentgenium	Rg					
112	Copernicium	Cn					
113	Nihonium	<sup>278</sup> Nh					
114	Flerovium	Fl					
115	Moscovium	Mc					
116	Livermorium	Lv					
117	Tennessine	Ts					
118	Oganesson	<sup>294</sup> Og					

\*6原子番号 93 の <sup>93</sup>Np 以降の原子核は、すべて人工的に作られ、超ウラン元素という。

## 関連図書

- [1] 柴田 徳思編, 放射線概論 (通商産業研究社)
- [2] 日本アイソトープ協会, やさしい放射線とアイソトープ (丸善)
- [3] 山崎 岐男, グレイの生涯 (考古堂 2000 年)
- [4] H. Weinberger, シーベルトの生涯 (考古堂 1994 年)
- [5] 赤羽 利昭, 見て学ぶ放射線 (通商産業研究所)
- [6] 日本アイソトープ協会, 放射線取扱の基礎 (丸善)
- [7] 日本アイソトープ協会, アイソトープ法令集 (丸善)
- [8] 日本アイソトープ協会, アイソトープ手帳 (丸善)